

---

# 魔法少女リリカルなのはPHANTASIA

風刻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはPHANTASIA

### 【Nコード】

N6990V

### 【作者名】

風刻

### 【あらすじ】

新暦80年、第45無人世界 サンジェルマン の古代遺跡にて、時空管理局執務官とその執務官補佐が、とあるロストログアの調査中に失踪した。執務官であるティアナは、失踪した二名の搭乗していた次元航行艦からの要請を受け、彼らの捜索を行うこととなるが……。謎の少女との戦闘。新暦75年への回帰。新たな友情。そして、迫られる苦渋の決断。それらを超えた先に待っているのは、果たして ? 魔法少女リリカルなのは PHANTASIA、始まります。

未来からタイムスリップ(？)したティアナが主人公の、歪なSt  
rickers再構成モノです。一応原作通りに事件が発生しますが、  
結構脇道に逸れます。初投稿ですので至らない点など多々あるとは  
思います。温かい目で見守ってやってください。

## パンタシア

「魔力反応、近いです。恐らくこの近辺に古代遺物が眠っているものかと」

「……そうか。ハルミ、いつでも対処出来るように、デバイスと集中力だけは手放すな」

「わかってますよ、エーリツヒ執務官」

仄暗い古代遺跡。遙か昔に主を失い、今となつては最早何のために建てられたのかすらわからなくなってしまった、栄華の残滓。永きに渡つて眠り続けていた、古代の記憶。

まるで時が止まっているかのような遺跡の中を、時空管理局の職員達が、エーリツヒと呼ばれた初老の男と、ハルミと呼ばれた若い女性を先頭にして、神経を尖らせながらゆっくりと歩みを進めていた。

「魔力反応、さらに近いです。……あつ」

「どうした？」

「ターゲット以外に、多数の魔力反応が発生、推定ランクはB。前方よりこちらに接近しています。……恐らく、この遺跡の防衛機構かと」

「総数は？」

「……およそ、60です。かなり密集している様子からすると、相

手は小型かと思われます」

「ふむ、武装局員は散開せよ！ 敵が陣形に侵入し次第、多段砲撃で包囲殲滅する！」

薄暗い部屋に響く足音。やがて武装局員の配置を終えると、指令役のエーリツヒも陣形に加わる。

「敵性魔力反応、更に接近しています！ 予想交戦時間まで、約14秒！」

「総員、砲撃準備！」

エーリツヒの指示で、局員達がデバイスを構える。

「……4……3……2……攻撃、来ます！」

「一陣、てえーッ！！」

局員達の前に、黒い虫のような何かの群れが姿を現したのと、ソレを無数の光の槍が飲み込んだのは、ほぼ同時だった。

「二陣、てえーッ！！」

続いて飛び込んでくるソレの群れを、局員達は淡々と光の中に消し去ってゆく。殲滅作業を繰り返すことしばらく、彼らに向かってくる敵はもうどこにもいなくなっていた。

「敵性魔力反応、全てロスト！」

「よし、皆ご苦労！ 攻撃がこの一回とは限らん。隊列を組み直し次第出発する！」

彼らは再び歩き出す。エーリツヒ達は警戒していたが、その後二度と襲撃を受けることは無かった。

重苦しい闇に包まれた遺跡の最奥。そこに、それはあった。

魔導書のような形をした古代遺物    ロストログアは、不気味な沈黙の中で仄かな光を放ちつつ、静かに祭壇の上に浮かんでいた。

「魔力反応、最大値を計測。……間違いありませんね。これが例のロストログアのようです」

「トラップらしきものは見当たるか？」

「いえ、特には」

「ならば即時封印作業に取りかかる。武装局員は周囲の安全を確保せよ。敵に奇襲されては敵わんからな」

武装局員達への指示を終えると、エーリツヒはロストログアに向かって剣状のデバイスを構える。

「ゆけるか、バルムンク」

『All right.』

「私も手伝います。……ブリーシंगाメン！」

『Yes master.』

エーリツヒは深呼吸をすると、魔導書を見据える。そんな彼を横目で一瞥し、ハルミは詠唱を開始した。

「輝ける祈り、我が願いを星に託し、彼の者に封印の力を捧げん……」

ハルミの封印強化魔法がエーリツヒのデバイスに宿る。刹那、エーリツヒは疾風の如く飛び上がった。

「我が剣閃を受けてみよ！ シーリングソード！」

『Sealing sword.』

一陣の風が翔ける。一瞬の交錯。音もなく着地するエーリツヒ。

「やったか？」

「まだわかりません」

封印の剣を受けて尚、魔導書は空中で静寂を保っている。誰もが固唾を飲んで見守る中、その時は訪れた。

『魔力反応を感知。《パンタシア》起動』

突如、魔導書を中心に大型魔方陣が展開。同時に、これまで沈黙を守っていた魔導書が機械音声と共に起動した。

「な……！ いかん、封印失敗か！？」

「……！？ そんな……！」

局員達の間を広まるざわめき。動揺する彼らを尻目に、魔導書は淡々と言葉を紡いでゆく。

『高次元異世界間転送を行います。安全の為、使用者以外は転送室から退避してください』

「まさか、封印の魔力に反応したのか……！ こうなっては何が起こるかわからん！ 総員退避！」

「早く！ みんな逃げて！」

弾かれたように出口に殺到する局員達。こうしている間にも、部屋には魔導書の魔力が満ちてゆく。

「ハルミ、お前も早く逃げろ！ わしは今一度封印を試みる！」

「そんな、父さん！？」

「早くしろ！ 巻き込まれたいのか！」

「イヤ！ 父さんを残して行けるわけじゃないじゃない！！」



一步も引こうとしないハルミ。エーリツヒが再度口を開きかけたその時、再び魔導書の機械音声が響いた。

『使用者の深層意識より指定世界を特定。転送開始まで、残り10秒』

「くっ、もう時間が……かくなる上は仕方がない！ ハルミ！ ーかハカ、封印強化を！」

「わかった！ ブリーシングアメン、お願い！」

『転送開始まで、残り5秒』

ハルミの封印強化を受け、エーリツヒは魔導書に最後の突撃を仕掛ける。

『転送開始まで、残り2秒』

「うおおおおッ！！」

バルムンクの剣先が、魔導書に迫る。永劫たる一瞬の静寂。そして

## パンタシア（後書き）

感想などお待ちしております。

## 銀の少女

第45無人世界 サンジェルマン。管理局の観測所があることを除けば、無人世界の名に相応しく、見渡す限りの荒涼とした大地に申し訳程度のひ弱な草木が点在しているばかり。空は年中塵と埃に覆われ、資源も乏しく、本来なら管理局からも無視されてしまうような世界なのだが、最近の調査で年代不明の遺構が複数見つかったおり、その手の人間が調査、もしくは盗掘目的で渡航することも多い。年代不明ということなく怪しげな肩書きのためか、一部ではこの世界こそがあの伝説のアルハザードなのは、などという風説が流布しているが、公の場では一笑に付されているのが現状だったりする。ともかく、今年で21になる若き敏腕執務官、ティアナⅡランスターが降り立ったのは、そういう場所だった。

「……まさに荒れ地ね」

ぐるうりと辺りを見渡して、一言。恐ろしく端的だが、事実これ以上に的確な表現が見当たらないのだから仕方がない。風にのって砂塵が舞い、ティアナは顔をしかめた。

ティアナが巡航艦ビスマルクから協力要請を受けたのは、彼女が別件で近くの管理世界に訪ねていった、その帰途のことだった。

内容は、第45無人世界での、恐らくロストロギアのものと思われる魔力反応の調査と、その先行調査中に失踪した執務官及びに執務官補の搜索。調査対象が情報未確認のロストロギアの上、既に二人の魔導師が失踪している。故に危険も未知数であるが、ティアナは彼女の関わった重大事件にロストロギア関連のケースが多く、今回の要請はその腕を買われたためであった。

『ランスター執務官、聞こえますか？』

ティアナに通信が入る。ビスマルクの通信手からだった。

「ええ、大丈夫です」

『はい、それでは事前の打ち合わせ通りに、管理局所有の観測所へ向かって、そこで詳しい説明を受けてください。ただいま観測所駐在の史跡警備隊員がそちらに派遣されていますので、案内はその方に』

「了解。……はあ……」

通信終了。モニターが消えると同時に、ティアナは溜め息をついた。

時空管理局執務官という職業柄、予定外の任務が入るのは仕方がないし、ここ数年の勤務でもう慣れもしていた。……ただ、今回はタイミングが最悪だった。

（よりによって、久しぶりにみんなと休暇が重なったって時に……）

元機動六課の面々は、それぞれが各々の道を歩んでいったため、当然休みが合うことは珍しい。加えて管理局の仕事はいつも何かしら忙しく、たとえ休みが合ったとしても出来ることは限られている。その珍しい休みを明日明後日と確保し、元六課の面々と久しぶりの顔合わせをしようと計画をしていたのだが、今回の調査協力でお預けになってしまった。

（……名残惜しく思うあたり、あたしもまだまだ、か）

ベテラン執務官たるもの、この程度で気落ちしてはいけない。ティアナは自嘲気味に苦笑した。

「おーい！」

ふと、誰か人の声がした。ティアナが声のした方をよく見てみると、砂塵で霞む景色の中に人影を見つけた。どうやら、観測所職員が到着したようだ。

「おーい！」

「こっちです！」

ティアナは手を降って居場所を知らせる。相手はすぐに気付いてれたみたいで、彼女の方に駆け寄ってきた。

「ティアナ＝ランスター執務官ですね？ 私、サンジェルマン史跡警備隊所属、エミール＝バイエルン一等陸士です。お待ちしております。お迎えが遅れて申し訳ございません」

そう言ってティアナに敬礼する青年、エミール。見た目からして、ティアナよりも三・四歳年下のようだ。

「いえ、あたしも今到着したばかりですから。迅速な対応、感謝します」

「お気遣いありがとうございます。それでは、ランスター執務官を観測所へとお連れします」

エミールは再び敬礼をすると、ティアナに背を向け元来た方へと

歩き出した。ティアナはもう一度だけ溜め息をつき、彼の後を追った。

観測所はすぐに見えてきた。地上六階建ての立派な建物で、周囲とのミスマッチ具合がなんとも言えない雰囲気醸し出している。

「どうぞ、中へ。所長がお待ちかねです」

建物の中は流石というか、ミッドのそれと大差ない生活環境が整っていた。職員達が自らの業務に励む中、ティアナは最上階の所長室へと通される。整頓の行き届いた小綺麗な一室の所長席には、金髪の少女が一人ちょこんと座っていた。

「失礼します。ソニア所長、ティアナ＝ランスター執務官殿をお連れいたしました」

「うむ。エミール君、案内ご苦労。通常業務に戻ってくれたまえ」

「はい、了解しました」

エミールは少女　ソニア所長と、ティアナに敬礼をして所長室を去っていった。

「さて……ランスター執務官、まずはこの度のロストログアの調査

及び不明人員の搜索における協力を、全職員を代表して感謝する。  
私はサンジェルマン史跡警備隊長、並びにサンジェルマン次元観測所所長、ソニア・リユークエル二等陸佐だ」

「ティアナ・ランスター執務官です。短い間ですが、お世話になります」

見た目が幼いとはいえ、一応相手は上官である。今度はティアナが敬礼をする番だった。

「うむ。本来なら客人には茶の一杯でもご馳走するのが礼儀なのだが、生憎そんな状況でもないようなのでな……早速だが、失踪している二名の話は聞いているか？」

「ええ、一応。確か、一人はエーリツヒ・ラインラント執務官、56歳。魔導師ランクは空戦A.A。もう一人はハルミ・ラインラント執務官補、18歳。魔導師ランクは陸戦B。二人とも巡航艦ビスマルクの乗員で、無人世界 サンジェルマン に存在する古代遺跡 ウィーナ 内でのロストロギア調査中に失踪……ですよね？」

「ああ。詳しいことは会議でも説明するが、二人が失踪した時に行動を共にしていた調査隊メンバーの証言に拠れば、彼らが問題のロストロギアを発見し、封印行動を開始した直後、ロストロギアが起動。ラインラント執務官の命令で全員が退避したのだが、気が付いたら二人とも消えていたということだ」

「つまり、失踪はロストロギアによって引き起こされた、と」

「証言を信用するならば、ほぼ間違いないと言ってもよいだろう。尤も、現時点ではロストロギアの防衛機能によるものなのか、純粹

にその効果によるものかはわからないがな」

「ちなみに目撃者が存在するということは、問題のロストログアの形状くらいは分かっているんですよね？ 無限書庫の方に調査依頼は出されたのですか？」

「大丈夫だ、その点は抜かりない。……ただ、やはり形状だけでは有用な情報になり得ないのも現状でな」

溜め息をつくソニア所長。その顔に有り有りと浮かぶ疲労の色は、彼女がこの問題に対して出来るだけの手を打とうと尽力している様子が見てとれる。ティアナは一瞬、在りし日の上司の姿を彼女の中に見た気がした。

「ともかく、今は一刻も早い失踪者の発見が求められる。……ランスター執務官、今一度ご助力を願う。どうか、我々に力を貸してほしい」

「はい、勿論です。このティアナ＝ランスター、微力ながら全力で協力させてもらいます！」

「ああ……ありがとう」

敬礼するティアナに向かって、ソニア所長は小さく微笑んだ。

対ロストログア特別会議の結果、本局から専門の部隊が到着するまでの間、臨時に搜索隊を組織、失踪者の搜索を行うことが決定さ



れた。尚、ロストログアを発見した場合、可能ならば封印活動を行うことが望ましいが、あくまでも最優先事項は失踪者の捜索である、ということ、危険な場合は即刻退避することが義務付けられた。

失踪の現場となった遺跡への突入部隊には、ティアナを初めとした経験豊富な者が選ばれ、残りの者は観測所にて総指揮を執るソニア所長の補佐をすることとなった。

「それでは、C班の任務についてもう一度説明します」

件の遺跡を前にして、ティアナは自らが指揮する部隊を見回した。

「まず、A班とB班が先発で突入、遺跡の防衛機構を抑えます。我々C班は彼ら先発隊が安全を確保した上で不明者の捜索をすることになります。ただ、不測の事態に備えて、全員デバイスはいつでも使えるようにしておいてください。後は……」

『失礼します。ランスター執務官、A B両班が出撃を開始しました』

「わかりました。安全が確認され次第、こちらも出ます」

『了解しました。……御武運を』

通信によるエミールの報告を受け、小さく頷くティアナ。いよいよ出撃の時。これからは気を引き締めなければならない。

一つ、大きく深呼吸。その時を今か今かと待ち続け、そして、

『A B両班により遺跡内は制圧、安全を確保しました！ C班、突入をお願いします！』

「C班、総員突入！ 二人一組に分かれて全力で不明者の搜索に当たるように！」

ティアナの指示で、遺跡内に散らばっていく搜索隊員達。ティアナ自身も、単身遺跡最奥へ向かった。

（思ったより広いわね……）

愛銃のクロスミラージュを構え、僅かな灯りを頼りに迷路のような遺跡内を進んでゆく。時々すれ違う先発隊の面々に情報を訊きつつ、あくまでも慎重に、無理をせず。

『Caution.』

遺跡に突入してからどれほどの時間が経っただろうか。突然、クロスミラージュの警告音が鳴り響いた。

「どうしたの、クロスミラージュ？」

『I sense a large magic signal. Please be careful.（大型の魔力反応を感じました。気を付けてください）』

「大型の魔力反応って……まさか、ロストロギア！？」

これは自分一人の判断で行動していい問題ではない。そう思ったティアナは、マニュアル通り司令部への通信を試みる。

「こちらティアナ」ランスター執務官。HQ、応答してください。  
……HQ、応答してください、HQ！……ウソ、繋がらない……  
？」

『Probably, the thick magic ret  
ard our communication.（恐らく、高濃度  
の魔力が我々の通信を阻害しているのかと）』

「くつ、面倒なことになったわね。一度戻って対策を……」

撤退を決断しかけたティアナ。だが次の瞬間、そんな彼女の目に  
あり得ないものが飛び込んできた。

「……え」

ティアナのいる場所から更に奥、遺跡の最深部へと通じる暗い道  
に、見事な銀髪の少女が吸い込まれるようにして消えていった。彼  
女が何者かは分からないが、少なくとも今の光景が「異常」だとい  
うことは紛れもない事実だった。

「クロスミラージュ、撤退は中止！ 今の子を追うわよ！」

『Roger.』

ティアナは謎の少女を保護すべく、彼女の後を追う。自らの走る  
足音だけが不気味に反響する中で、だが先程の少女の姿は影も形も

ない。

それでも辛抱強く追跡を続けた結果、ティアナはとうとうウィーナ遺跡の最奥、失踪事件の真の現場へと足を踏み入れることとなった。

「これは……！」

これまでとはうって変わって、薄明かるい光に満ちた部屋の中央、祭壇らしきものの上に浮かぶ魔導書。そしてそれに手を伸ばす銀髪の少女。ティアナは直感で、その魔導書が例のロストロギアだと理解した。

「そのあなた、動かないで！」

「！」

ティアナの声に、少女の動きが止まる。クロスミラーージュの銃口を向けながら、ゆっくりと少女に近づいてゆくティアナ。

「この遺跡は第一種立ち入り禁止区域に指定されています。危険ですので、一般の方はすぐに退避してください」

ティアナは少女にそう警告する。無論、彼女が素直に従うなどとは思っていない。あくまでも、形式的なものに過ぎなかった。

「もし抵抗するようでしたら、執務官権限に基づき、公務執行妨害によりあなたを逮捕します」

「……ふうん。私も焼きが回ったものね。すぐ後ろにある気配に気付かないなんて」

意外にも素直にホールドアップする少女。少々不審に思いながらも、ティアナはゆっくりと彼女を魔導書の側から引き離した。

流れるような銀髪を肩まで伸ばした15・6歳くらいの少女は、特に抵抗するでもなく、だからといって協力的というわけでもなかった。

「あなたの目的は？ どうしてこの遺跡に？」

「さあね？ 貴女に答える義理はないわ」

銃口を突きつけられるも、不遜な態度をとり続ける少女。

「……とりあえず、あなたを観測所まで連行します。くれぐれも抵抗などほしくないように」

「嫌よ。私にはやることがあるもの」

「！」

刹那、少女の姿が掻き消える。ティアナは反射的にスタンバレットを撃ち放ったが、虚しく空を突き抜けた。

「だから悪いけど、捕まるわけにはいかないのよね」

「！ いつの間に……！！」

消えた少女はティアナの後ろに立っていた。ハッとして距離を取るティアナ。初めこそ驚いたものの、ティアナは冷静に状況を分析する。

（今は高速移動……いや、空間移動系の魔法かな。……厄介ね）

「ほら、どうしたの？ 私を逮捕するんじゃないの？」

「くっ……！ クロスファイヤーシュート！」

橙色の弾丸が無数に生成され、少女に向かって放たれる。だが、少女は先程のように消えてしまい、行き場を失った弾丸は空中で炸裂する。

「ほらほら、どこを狙っているのかしら？」

またしてもティアナの後ろに現れ、クスクスと嘲笑する少女。

「……もちろん、あなたを狙ってるのよ！」

「ッ！？」

だがティアナは同じ手を二度も喰らうほど、愚鈍ではない。全て炸裂したかのように見せかけた魔弾、その内の二発の隠し弾が、すっかり油断していた少女を真後ろから襲った。

咄嗟にシールドを張り、魔弾を防ぐ少女。そんな彼女に追い打ちをかけるティアナ。新たに生成されていた12の弾丸が、少女のから空きの背中を直撃した。

巻き起こる魔力爆発。部屋中に朦朧とした煙が立ち込める。

（少しやり過ぎたかしら……加減はしたんだけど）

「中々やるじゃない……貴女のこと、正直見くびってたわ」

「！」

仕留めた、そう思っていたティアナは、煙の中に響く少女の声に目を見開いた。

「ほんのお遊びのつもりだったけれど……いいわ、相手をしてあげる」

煙が晴れ、そこにいたのは白いローブ状のバリアジャケットに身を包んだ無傷の少女。そしてその手には、彼女の髪と同じ色の大弓が握られていた。

「今度はこっちからいくわよ。ムーンライトアロー！」

（速い！）

銀の弓から放たれた矢が、輝く軌跡を残しながら一直線にティアナに迫る。矢は単純な軌道なれどかなりの弾速で、ティアナは感覚で横に跳び、辛くもそれを避ける。

間髪入れずに再び飛来する銀色の矢。ティアナはそれを前に跳び出すようにしてかわすと、お返しとばかりに時間差で三発、ヴァリアブルバレットをお見舞いする。だが、先程も見せた少女の転移魔法のせいで、有効打を与えるには至らない。

「一対一で、それもこんな屋内で弓なんて使うもんじゃないわね。扱いにくくてしょうがないわ」

「なら無駄な抵抗はやめて降参しなさい。そうね、今だったらまだあなたには弁護の機会があるわよ」

「降参？ ご冗談を！」

少女は再び弓を構える。そして、

「今度は本気の一撃よ。……狂乱に踊れ、ルナティックアロー！」

天に向かって放たれた白銀の矢は空中で無数に分裂、拡散したそれは銀の暴風となって、無秩序な軌道を描きティアナへと襲いかかる。

「っ！」

途切れることなく続く、四方八方からの矢の嵐。さすがのティアナも、これには防戦を強いられるしかなかった。

「どう？ 降参するのは貴女の方じゃないかしら？」

「笑止！」

ティアナはプロテクションで身を護りつつ、戦況の打開策を考える。

おびただしい数の矢だったが、きつといつかは途切れる。そのときが反撃の好機になる。実際、その機会は唐突に訪れた。

（今っ！）

『Dagger mode』

嵐が去った刹那、ティアナはクロスミラージユをダガーモードに



変化させ、少女の懷に飛び込もうと

「……ムーンライトカノン！」

「砲撃！？　しまっ　！」

飛び出したティアナを待ち受けていた至近距離からの砲撃魔法の洗礼。しかし蒼白い光の奔流は、間一髪でティアナを捉えることはなかった。

（なるほど、あたしが足止めされている内にチャージしたってわけね……）

ますますもって厄介な。ティアナは額の汗を拭う。

（早く勝負を決めたいけど、まともにやっただって避けられる。それなら……）

「ボーツとしてる暇はないわよ。ルナティックアロー！」

再び飛来する銀の暴風。為す術なくプロテクションに閉じ込められるティアナ。

「さて、今度は逃がさない……？」

しかし嵐が去った時、ティアナの姿はどこにもなかった。砲撃をチャージしたまま、周囲を見回す少女。

「……そこね！」

「！」

物陰に隠れて狙いを定めているティアナを見つけた少女は、今度こそ容赦なく砲撃魔法を発射。寸分変わらず彼女を光の中に消し去ったかのように見えた。だが、

『Stun bullet.』

「！？」

背後からの奇襲。少女が咄嗟に防御して振り返ると、つい今さっき撃墜したはずのティアナが、そこにいた。思わず後退りする少女。

「貴女、何で……！ まさか、幻術！？」

「ええ、そうよ。さあ、観念なさい！」

「ふ、ふん、目眩まし風情が何度も通用するとは思わないことね！」

双方一步も譲らない攻防戦。睨み合いが続く中、しかし、二人とも失念していることがあった。

『転送開始まで、残り2秒』

「「え」」

耳慣れない機械音声。そして、二人が状況を把握する間もなく、祭壇の部屋をまばゆい光が包み込んだ。

『転送を完了しました』

## 銀の少女（後書き）

感想などお待ちしております。

新暦75年

「ん……」

ティアナはゆっくりと目を開ける。視界に写ったのは、カビ臭い遺跡の天井……ではなく、近代的な綺麗な天井。それを見て初めてティアナは自分がベッドに寝かされていることに気付いた。

（ここは……病院？ あれ、あたし、確か遺跡で女の子と戦闘中に……）

そこから先の記憶がない。ひょっとして、彼女に負けて搬送されたのではないか。嫌な想像が頭をよぎり、ティアナはたまらず起き上がった。すると、

「あ、気がついた？」

「……！ シヤマル先生！？」

病室に入ってきたのは他でもない、元六課の医務官、シヤマルだった。予期せぬ再会に、混乱するティアナ。

「えっと、どうして……」

「あら、覚えてないの？ 今日の模擬戦でなのはちゃんに撃墜されちゃったこと」

「え……」

シャル先生は一体何の話をしているのだろう。模擬戦で撃墜？  
なのはさんに？　ますます訳がわからなくなるティアナ。

「うーん、なのはちゃん、加減はしたって言ってたんだけどなあ」

「……あの、失礼ですが、ドッキリか何かであたしをからかってる  
んでしょうか？」

「ドッキリって……なのはちゃん、ホントに加減したのかしら」

苦笑するシャル。そんな彼女を見て、そして周囲を見回してみ  
て、ティアナはある一つの仮説　突拍子もないことだが　を思  
い付いた。

「あの、シャル先生」

「うん？」

「今、新暦何年ですか……？」

恐る恐る尋ねる。願わくは、自分の仮説が間違っていますように、  
と真摯に願いながら。

「え？　勿論新暦75年だけど……いきなりどうし」

「　　ッ！？！？？」

「あつ、ティアナ！　いきなり走ったら　」

シャルの怒ったような声が聞こえるが、今のティアナの耳には

届かなかった。

医務室を出て、通路で会う人全員に暦を訊いていく。だが、返ってくる答えは皆同じ「新暦75年」。しかも、その内に自分がいる建物、旧機動六課の隊舎そのもので、自分が六課の隊服を着て髪を二つに結んでいることに気が付いたりして……じわじわと突拍子もない仮説が現実味を帯びてくるのを、ティアナはうすら寒い気持ちで感じていた。

「はは、そんな……まさか……！」

JS事件を解決し、念願の執務官になってマリアージュ事件を解決し、あの遺跡で謎の少女と戦闘し、それら全てが、ただのリアルな夢だったとでもいうのだろうか。認めたくない現実がどつと押し寄せ、廊下に崩れ落ちるティアナ。

「ティアナ！」

「！」

そんなとき、絶望しかけたティアナの耳に響く、親友の声。顔を上げれば、親友とフォワードの仲間達が、自分の方に駆け寄ってくるのが見えた。どうしようもない絶望感が、数歩遠のいた。

「スバル……それに、エリオ……キャロ……」

「ティア、ごめん！ あたしが……あたしがもうちょっとちゃんとしてたら……！」

スバルがどうして謝っているのか、ティアナには大体想像がついた。恐らく、あの日の模擬戦、自分が無茶な作戦をして、なのは

さんに撃墜されてしまった　のことだろう。

「えっと、ティア……?」

ただ、ティアナからしてみればそんなことは遠い過去の話。とつ  
くに済んだことな訳で。

（参ったなあ……）

20歳だった自分からすれば幼く見える、目の前の15歳のスバルの申し訳なさそうな表情に、一体どんな反応をしてくれるのやら。  
ティアナは対応に困ってしまった。

「はいはい、その辺にしておきなさい」

「……!」

不意に、この場で聞こえるはずのない声が、聞こえた。同時に、  
薄れかかっていた記憶の数々が、鮮明な色彩を持って甦る。

「あ、ルナ……」

「ティアナは今とってもナイーブな心境なんだろうから、そつとし  
ていて」

「動かないで」

刹那、ティアナはクロスミラージュを声の主に突きつける。この  
一瞬の出来事に、ティアナを除いた全員が、彼女の突然の行動に呆  
気にとられてしまう。



「……何の真似かしら？」

声の主、遺跡で戦った銀色の髪の少女が、その時と全く変わらな  
い姿のまま、困惑したように言った。

「答えて。どうしてあなたがここにいるの？」

寸分変わらず狙いをつけながら、小さく低い声で少女に問う。その  
時、少女の目が一瞬悲しそうに伏せられたのを、ティアナは見逃さ  
なかった。

「わ、わ、わ、ちょ、ティア！ こんなところ誰かに見られたら不  
味いって！ 何があったか知らないけど、とりあえず落ち着いて！  
ルナも、ティアを怒らせるようなことしたの！？ ええと、ほら  
！ とにかく二人とも謝って！ あれ、でも謝らなきゃいけないの  
はあたしの方で、でもティアもルナに酷いことしてるし、でもルナ  
も……」

「あの、まずスバルさんが落ち着いた方が」

「ティアさん、早くデバイスをしまってください！ もし隊長達に  
見られたら……！」

「……………」

仲間達に諭され、渋々銃を引っ込めるティアナ。しかし、先程ま  
でティアナと戦っていたはずの少女に、警戒の眼差しを向けること  
は止めない。

『ティ……貴女、後で話があるの。裏まで来れる？』

『……ええ。あたしも訊きたいことが山ほどあるわ』

二言三言、念話で話を付け、何とかその場は収まった。ティアナの記憶にある「あの時」とは違った重苦しい空気が流れていた。

六課隊舎の裏の林。そこでティアナと少女は二人きりで対峙していた。

「……最初に一つ確認させてもらっわ。貴女は新暦80年のある日、サンジェルマン無人世界の古代遺跡内で、私と戦闘した時空管理局執務官、ティアナⅡランスター……間違いないわね？」

「……ええ、そうよ」

「貴女は私との戦闘中に意識を失い、気が付いたら『ここにいた』……そうでしょ？」

「そう、だけど……ここは何なの？ 本当に新暦75年のミッドチルダなの？ あなたは一体誰なの？ どうしてここに……」

「ああ、もう！」

次から次へと出てくる質問に、少女は煩そうに首を振った。

「そんなに一遍に訊かれても答えられないわよ！」

「……………」

「全く……まず、ここは新暦75年のミッドチルダ。これは間違いないわ。……ただし、貴女の知る『ミッドチルダ』ではないけれど」

「……………どうということ？」

「あの部屋にあったロストログア『パンタシア』。あれの効果はね、使用者を自身が望む平行世界へと転移させるものなの。あの頃へ戻りたい。失われた過去を取り戻したい。大事な人を救いたい……そんな人々の想いの結晶が『パンタシア』なのよ。……ここまで言えば、私達がどういいうことになってるのか、頭のいい貴女ならわかるでしょ？」

「平行世界……起こったかもしれない、可能性の世界に迷いこんでる……………」

「そういうこと。……信じる信じないは貴女の勝手だけど」

ポツリと呟いたティアナの答えに、満足げに頷く少女。

「次は私についてだけど、まず、私の名前はルナ」モーロック。『あの』世界では……ま、しがたい遺跡盗掘者とも思ってもらって構わないわ。そして『この』世界では……」

少女　ルナは一旦言葉を切り、そして、続ける。

「古代遺物管理部機動六課のフォワードで、スバル・ナカジマとティアナ・ランスターの親友ってところかしら。私の意識が飛ばされたのは今から2年前で……貴女達と知り合ったのも、丁度その頃」

「っ！」

ちくり、とティアナの心が痛んだ。さっきから引つ掛かっていた隊舎で見せた自分を氣遣うような表情。銃を突き付けた時の、傷付いたような表情。あれはきつと、ルナの本心だったのだろう。……それを知った今、ティアナは軽い罪悪感に苛まれた。

「……なんか、色々ごめん」

「気にしないで。私もそのデバイスを見たとき、同じようなことをしたから」

ルナは自嘲気味に笑って言った。

「それから、今後のことなんだけど……」

ルナが再び口を開こうとした、その時。

『A L E R T 』

「「！！」」

鳴り響く警戒警報。ティアナとルナは、互いに顔を見合わせる。

「……ルナ、だっけ？ 隊長達の所まで急ぐわよ」

「ティ……えつと」

ティアナの名前を呼びかけて、口をつぐむルナ。そんな彼女の様子を見て、ティアナは優しく微笑んだ。

「ティアナでいい。『あの』世界では敵同士だったけど、『この』世界では親友なんでしょう？　だったら、変に遠慮なんかしてたら不自然じゃない。……違う？」

「……………」

「あなたが出てきてくれたとき、正直あたし、ホツとしたの。自分のしてきたこと、苦しかったこと、楽しかったこと……やっぱり夢や幻なんかじゃなかったんだってわかったから。それに……これからはさ、あなたがあたしにとって唯一の『証人』なんだから、よそよそしくなんてしてられないでしょ？」

「……そうね。それじゃあ……ティアナ、行きましょう」

「ええ」

二人は頷き合つと、隊舎に向かって駆け出した。一言「ありがとう」という言葉を残して。

「ティアナは、出動待機から外れところか」

(……そういえば自分は渦中の真っ只中にいるんだった)

ヘリポートにて、ティアナが恩師から直々に言われた第一声がこれである。

『ちょっとティアナ、みんな貴女を腫れ物でも触るような目で見てるじゃない』

『仕方ないでしょ。あんだけ思い詰めてた後なんだから』

ティアナの過去の記憶には、この時のことは出来れば封印したい  
—コマとして残っている。

(確かあの時は思いっきり口答えしてシグナム副隊長に殴られたんだっけ)

思い出すだけでも痛い。もうあんなことはゴメンだ、というのが  
正直なところティアナの本音だったりする。

「あの、ティアナ？」

「はっ、はい！」

「さっきからずっと頬をさすってるけど……どうかしたの？」

「あ、えーっと、何でもないです、何でも」

「そう？　ならいいんだけど……」

笑って誤魔化すティアナ。すると、今度は全員から奇異なものでも見るような目で見られてしまう。

「おい、ティアナ」

「なんですか、ヴィータ副隊長」

「お前、本当にティアナか？」

「え……？」

「いや、あんなだけぶちのめされた割に、あんまりにも立ち直るのが早いもんだから……と、すまん。忘れてくれ。わかってくれたんならそれでいいんだ」

どこか腑に落ちなさそうな様子のヴィータだったが、結局どうにか無理矢理納得したらしい。

「おい、皆さん方！　早く乗っちゃってくださいえ！」

ヴァイスの急かす声が聞こえる。

「それじゃあフォワードの皆はロビーで待機。ティアナは……後で、わたしとお話しようね」

「あ、えっと……はい」

なのはの言葉に、ティアナは曖昧に微笑んだ。

「ティア、ホントにもう大丈夫なの？」

「うっさいわね。平気って言うてるでしょ？」

「で、でもお……」

六課ロビーにて。フォワードメンバー全員が集合している中、ティアナはかれこれ20分ほど、スバルからの心配性攻撃を受けていた。

「でももへちまもないわよ！ あたしが大丈夫って言うてるんだから大丈夫なの！」

「うっ……」

尚も食い下がるスバル。そんなスバルを小突くティアナ。思えばこんなやり取りでさえ懐かしくて、ティアナは思わず微笑んでしまふ。

「……ティアさん、何だか嬉しそうだね」

「なのはさんに撃墜されて、何か吹っ切れたのかな？」



「なーに、そのチビツ子二人。あたしがどうかした？」

「い、いえ！ 何でもないです！」

「あ、あはは……」

どこか遠慮がちなエリオとキャロ。ティアナはそういえば、と思  
い出す。

（この二人と本格的に仲良くなったのって、確かこの事件の後だっ  
たっけ）

一人感慨に耽るティアナ。初めこそ戸惑ったものの、ルナが説明  
をしてくれたおかげで大分状況が飲み込めた今となっては、見るも  
の聞くもの全てが懐かしい。この世界の自分は、今この時のこ  
とを後でどんな風に振り返るのだろうか。そう考えたところで、テ  
ィアナは一つの疑問にぶつかつた。

「あ、そうそうルナ」

「何、ティアナ？」

「私達つて元の世界から次元転送されてきたんでしょ？ じゃあこ  
の世界の元々の私達つて、一体どうなってるの？ あたしが二人い  
たりとかはしないわけ？」

「うーん、その辺のことは詳しく説明するとめんどくさいんだけど、  
パンタシアの転送方法って、ちょっと特殊なのよ」

『特殊？』

『そ。パンタシアは人を転送するとき、その人の身体を意識体に変換して、転送先の世界の同一人物に重なる効果を持っている、っていうとわかりやすいかしら？』

『重なるって、ユニゾンみたいなもの？』

『概ねそんな感じね』

『ふーん。それにしても、ルナってやけにそのロストログアに詳しいわよね』

『……調べたのよ。この二年間、無為に過ごしてきたわけじゃないんだから』

『二年間ねえ……あ、そういえばちょっと不思議に思ったんだけど』  
『』

「ねえ、ティア！　ティアってば！」

「えっ、ああ、スバル。どうしたの？」

念話に夢中で、周りに気を配るのをすっかり忘れていたティアナ。気付けばスバルが心配半分、不機嫌半分の表情で彼女を見ていた。

「どうしたの、じゃない！　さっきからずっとブーツとしてるし、何だか今日のティアはおかしいよ！　ねえ、やっぱり昼間の模擬戦のせいなの？　あたしが失敗しちゃったから」  
「」

「スバル」

どこか思い詰めた様相を見せる若き親友に、ティアナは諭すように話し掛ける。

「あたしは本当に大丈夫。……今日の模擬戦でなのはさんが言いたかったこと、あたしなりにちゃんと納得出来たから。別に、あんたが何か悪いわけじゃないのよ」

「そうよ、スバル。本人が大丈夫って言ってるんだから、信用してあげれば？ あれだけ派手にやられた後だし、変な気を起こしたりはしないでしょうよ」

「……うん」

ルナの後押しもあってか、口ごもるスバル。その時、

「フォワードのみんなさ、ちょっと……いいかな？」

一条の閃光が迸り、刹那、ガジェット？ 型の一群が、黒々とした夜天から根こそぎ削り取られる。なのははその様子を確認すると、小さく頷いた。

「こちらスターズ1。海上に確認されていたガジェットドローン？  
型を全機撃墜しました」

『了解。機体の残骸は海上観測隊に回収を依頼しました。スターズ  
1・2、ライトニング1は帰投してください』

「了解」

ロングアーチとの通信を終え、たった今自らが守った空を見上げる。そんな彼女に近づく、赤い影が一つ。

「なのは」

「あ、ヴィータちゃん。お疲れさま」

「おう、なのはもな」

スターズの二人は、静かな夜空を平行して飛んでいく。

「……なあ、なのは。ティアナのことだけだよ」

ポツリと、ヴィータが言った。

「あいつ、本当にわかったのかな。……なのはの、教導の意味」

「んー、きっと大丈夫だよ。ティアナも他のみんなも、賢くていい  
子だから」

「なのはがそう言うんなら、あたしはそれを信用するけどさ……」

なんか引つ掛かるんだよなあ、というヴィータの眩きは、近づいてきたヘリの音に飲まれて消えた。

「なのはさんは、みんなに自分と同じ辛い思いをさせたくないんだよ……」

六課ロビーにて。沈黙が支配する中、シャリオは静かな口調でそう言った。

シグナムとシャマル、当時をよく知る二人の説明を交えながら、自らが尊敬するなのはの過去を知ったフォワード陣は、皆一様に絶句していた。

今では親友であるフェイトとの、文字通り命懸けの戦い。決して譲れないものを賭けた、ヴォルケンリッター達との死闘。そのどれもが新人達の想像を絶するもので、今現在の彼女達の様子を見ると、とてもではないが実際に起こった出来事として認識し難いほどの現実。

そして……凄惨な撃墜事件。生死の境を彷徨う程の重傷、痛々しい治療の様子と、辛いリハビリの日々。普段、明るく自分達に接してくれているなのはの壮絶な足跡を、通算二度目の視聴となるティアナも含め、全員が食い入るように見つめていた。

（やっぱり、なのはさん達から見たら、あたしはまだまだ若造か……）

念願の執務官になり、数々の難事件を手掛けてきたつもりでも、恩師とはまだまだ遙か遠い距離がある　ティアナは、改めてそう実感していた。

「次元が違っわね……魔力も、経験も、何もかもが規格外」

ルナがポツリと呟いた。

「まさか、なのはさん達の過去にこんな……わたし達と変わらない歳のはずなのに」

「……うん。大切なものを守るために戦って、時にはすごく傷付いたりもして……それが、隊長達の強さの理由なんだ」

エリオとキャロは、たった今知った事実に衝撃を受けながらも、何とかそれを肯定しようとしていた。

「……………」

スバルに至っては、普段の彼女らしくもなく、ただひたすら黙って俯いているだけだった。

「ごめんね、みんな。いきなりこんな話なんてしちゃって。でもね、みんなにはわかってほしかったんだ。……なのはさんの、教導の意味」

「……絶対に無茶をしないで、みんなが安全に帰ってこられるように」

ティアナの口から、流れるようにこぼれ落ちた言葉。そんな彼女

に一瞬なのは影が重なった気がして、シャリオはっとしてティアナを見た。

「ティアナ……」

「ごめんなさい。あたし、バカでした。弱い自分が許せなくて、それで、パートナーを危険な目にあわせるような無茶をして……それで、また自分が許せなくなって、結局また迷惑かけるようなことをして……」

「ううん。ちがう、ちがうよ、ティア！」

ポツリポツリと語り始めるティアナを、不意にスバルが半ば悲鳴のような調子で制止する。

「確かに教導は無視しちゃったかもしれない。でもさ、ティアだっただけ自分なりに『強くなりたい』って思いで、どんなにキツイ状況でも切り抜けるようにって、毎日毎日必死に頑張って、努力してただけなんだよね？ それっていけないことなのかな？ ……ポロポロになるまで自主トレしてたティアの姿を、あたしは一番よく知ってる。なのに……あたっ」

そんなスバルの額に、溜め息をついたティアナがデコピンを一つ。

「まったく、あんたは優しくすぎるのよ、スバル。いい？ あたしは確かに強くなりたいって思ってた。でもね、その『強さ』は、結局のところ自己満足のためのものに過ぎなかったのよ。そんな自分勝手なエゴのただけに、護るべき味方を誤射しそうになった。……これだけで、あたしがどんなに身勝手に間違ってるか、あんたにだってわかるでしょ？」

「……………」

「それにね……確かに、どうしようもなく切羽詰まっちゃって、無茶をしなくちゃならない状況だってあるかもしれない。でも、少なくともアグスタのあの時は、味方を危険に晒してまで無茶をする場面じゃなかった。……そうですよ、シグナム副隊長？」

「……そこまでわかっているのならば、私から改めて何か言うことはない」

烈火の騎士の無愛想な肯定の返事に、ティアナは小さく微笑んだ。

「でも、ティアはそれでいいの？」

「あたしはこれでいいと思ってる。少なくとも、実戦でまた無茶をして、取り返しのつかないことになるよりは」

きっぱりとそう言い放つティアナ。スバルはしばらくの間、じつとティアナを見つめていたが、

「……そっか、そうだよ。あはは、ティアは強いなあ……あたし、余計なお節介、だったかな？」

「バカね。さっきも言ったでしょ、あんたは優しすぎるって。……でもまあ、ありがと。あたしのこと心配してくれて」

「ティア……うつつ、ティアあゝっ！」

「あつ、こら！ 離れなさいよ！」



感極まってティアナに抱きつくスバル。シャリオを初め、その様子を微笑ましく思いながら眺める一同。

「……ああアツいアツい。まさに相思相愛ね」

「ルナ、なんか言った？」

「いえ、別に」

ボソツと呟いたルナを、ティアナはジト目で睨み付ける。と、その時、上の階からロビーへ降りてきた人が一人。

「……なんだか、わたしが出るまでもなく終わっちゃった、って感じだね」

唐突にやって来たのは、任務を終えて帰還した高町なのはその人だった。

「なのはさん！」

「ただいま、みんな。解散命令出てたみたいだけど、伝わってなかったかな？」

首を傾げるなのはを見て、あっと小さく声をあげるシャリオ。

「……ごめんなさい！ リイン曹長に任せっきりで、つい……！」

「もう、ダメだよシャーリー。ちゃんとオペレートしてくれなきゃ。

……それで、みんなはここに集まって何を見てたの？」

「え、いや、あの、それは……」

なのはに訊かれて、シャリオは慌ててスクリーンを閉じる。

「怪しいなあ……ルナ、教えてくれる？」

「えーっと、空のエースオブエースの波乱万丈な生き様を少々」

「それってつまり……シャリリ？」

「わああ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

必死に平謝りを繰り返すシャリオに、元々怒ってなどいないのははクスクスと笑った。

「でも、ティアナの様子を見る限り、わたしの恥ずかしい失敗談が役に立ったみたいだから、別にいいんだけどね」

なのははそう言ってティアナに向き直る。

「ティアナ、わたしの言いたかったこと、ちゃんとわかってくれたよね？」

「はい、高町教導官。『まずは自分の得意な所を完璧にする』。あたしの射撃魔法だって、上手く使えばあんなに強くなるんだって」

「……うん、これなら安心だね。ティアナ、ちょっとクロスミラージュ貸してくれる？」

(そういえば、ダガーモードってまだ解禁されてなかったっけ)

内心苦笑しつつ、ティアナは素直に自らの相棒を手渡した。

「クロスミラージュ、テストモードリリース」

『Yes.』

「はい、ティアナ。命令してみて、『モードツー』って」

「……モード・ツー」

『Set up. Dagger Mode.』

クロスミラージュの形状が変化し、何度もティアナの危機を救った魔力刃が姿を現した。

「ティアナは確か、執務官志望だったよね？ 執務官はどうしても個人戦が多くなっちゃうから、いつかは必要になると思って付けてただけど……ティアナ、焦っちゃったんだよね。わたしの教導って地味だから、強くなってる実感がなかったんだよね」

「……ごめんなさい」

やや自嘲的な調子のなのはの言葉に、咄嗟に否定したい衝動に駆られる。だが、それを何とか抑えた口から代わりに出てきたのは、あの時と変わらない謝罪の言葉だった。

「……うん。それじゃあみんな、今日はもうゆっくり休んで、明日からまた訓練頑張ろ？」

フォワード一同の威勢の良い返事で、その日の任務は終了となった。

部屋に戻り、ティアナは今日一日のことを振り返る。ウィーナ遺跡で銀髪の少女　ルナを見かけてからあり得ないことの連続で、まるで夢でも見ているような気分だった。

（でも　　）

こんな夢なら、また見ても良いかもしれない。心地よいまどろみの中、ティアナはそう漠然と思いながら、暗闇に意識を手放したのだった。

新暦75年（後書き）

感想などお待ちしております。

## 訓練とプチ疑念（前書き）

3000PV、500ユニークアクセスを突破しました！　こんな拙作を読んで下さってる方に感謝感謝です！　三話の終わりが明らかに尻切れトンボだったので、大幅に加筆しました。大変申し訳ございませんが、時間があるときにでもお読みください。

## 訓練とプチ疑念

「ティア〜、起きて〜」

「……………」

「ティアってばあ〜」

「んー……………」

「ティア〜…………えいつ」

「つい！？」

セクハラをして、蹴り飛ばされるスバル。平行世界でのティアナの朝は、ある意味現状という理不尽な現実を忘れさせてくれるものとなった。

「あんたはあ〜！ セクハラはやめなさいって何年言い続ければ分かるのよ！ もう子供じゃないんだから、こんなバカみたいなことするんじゃないの！」

「あ、いたいいたいいたい！ ティア〜、ごめんなさ〜い！」

必死に鳴くスバルに、ティアナは容赦なく制裁を加える。その内本当に泣きそうになってきたので、お仕置きは終了となったのだった。

「それにしても、なのはさん達って本当にスゴかったんだね。昨日の映像、あれってなのはさん達が9歳の時のなんだよね？」

身支度を整え、二人で早朝訓練に向かう途中のこと。憧れオーラを撒き散らしながら、スバルがぼやぼやした様子で言った。

「そりゃね。子供の頃から命懸けの戦いで鍛えられてきたんだもの。あたし達とは土壌からして違う」

「あたし達もいつか、あの人達と肩を並べて仕事ができる日が来るのかな？」

「……あんたの努力次第ね」

「楽しみだなあ……よし、今日も訓練頑張るぞー！」

ティアナの本音は、「スバルはともかく、自分はちよつと……」である。実際ティアナのいた新暦80年代には、スバルは更に優秀な魔導師へと羽ばたこうとしていた。それでティアナは卑屈になるか、と言われれば、全くそんなことはなかったのだが。

「二人とも遅いわよ」



ティアナ達が訓練場にやって来ると、ルナとライトニングの二人は既に自主訓練を始めていた。

「ごめんごめん、ティアがなかなか起きなくてさ」

「あんたのスキップが余計な手間を取らせたからでしょうが」

「……どうでもいいけど、さっさと準備運動くらいしたら？ ケガしてもしらないわよ」

それからしばらく、教導官であるのはがやって来るまでの間、各々が軽く体を動かしていた時のこと。ティアナは昨日訊きそびれたことをいくつか、ルナに尋ねてみることにした。

「ルナ、あなたって分隊はスターズ？ ライトニング？」

「私はライトニングよ。一応、ポジションはセンターガード。ただ、隊長戦みたいにフォワード全員で動く時は、キャロと同じフルバックも担当するわ」

「フルバックって、攻撃主体でってこと？」

「ええ。アウトレンジからの長距離砲撃、ロングレンジからの支援砲撃が私の主な役割ね。ま、気休め程度なら補助魔法も使えるし、射撃も苦手じゃないから、結構自由に動けるんだけど」

遺跡での戦闘経験から、その実力はティアナも重々承知している。なるほど、彼女がいれば色々な局面で作戦の選択肢が増えるだろう。

「ただし、クロスレンジだけは勘弁ね。保身しか出来ないから」

『……センターガードも兼任するのに、それじゃ結構厳しいと思うけど』

「はい、みんなー、集合！」

と、ここであやくなのはの号令が入った。元気のいい返事と共に集合するフォワード一同。

「ごめんね、ちょっと遅れちゃった。みんな、準備はいい？ 初めはそれぞれの基本の型をもう一度復習。今日はそれから次の訓練に入ろうか」

「……はいつ！」「……」

「うん、いい返事。それじゃあ、始めようか」

こうして、ティアナにとっては久しぶりとなる、なのはの教導が始まった。

「ティアナ、ルナ、二人はシューティングターゲットについてみよう」

なのはの言葉と共に、林を模したバーチャル空間のあちこちに標的が配置されてゆく。

「今日は両者対抗で撃墜数を競ってもらうよ。二人とも、大丈夫？」

「はい、なのはさん」

「問題ありません、教導官」

口々に返事を返すティアナとルナ。

「じゃあ、始めるよ。レディー……ゴー！」

「いくわよ、クロスミラージュ。クロスファイヤー……シユート！」

ティアナは号令と同時に十二発の魔弾を生成、それらを操って四方八方の標的を正確に次々と破壊する。

「精密操作は苦手なんだけどね……アストラルシユーター！」

ルナも負けじと蒼白の魔弾を八発放つも、数の差故にティアナの処理能力には及ばない。二人の得手不得手もあるが、ティアナが執務官として積み重ねてきた戦闘経験やスキルが、本来のこの時間軸の彼女のそれを格段に上回っていたのも大きかった。

当然、事情を知らない人間には昨日今日でいきなり動作が大幅に改善されたように見えるわけで、それは教導官であるのはも例外ではなかった。

「二人とも、ちょっとストロップ！」

なのはの制止に、二人は何事かといった様子で彼女を見る。

「ティアナ、なんだか動きも魔法のキレも別人みたいに良くなってるんだけど……ひょっとして、秘密特訓とかしてたの？」

「え……それは、えっと……」

答えに窮し、気付かれないように視線でルナに助けを求めるティアナ。

『とりあえず、適当に誤魔化しときなさいよ。下手に本当のことを言つと、精神異常で病院送りにされちゃうかもしれないし』

「……その、すみません」

「うーん、別に謝ることじゃないんだけどね。ただちょっと……まあ、強くなるのはいいことなんだけど……」

ルナの助言通り、その場をはぐらかして凌ぐ。色々と困惑しているのはを見て、これからは実力を出し控えようと決めたティアナだった。

「それじゃあ、朝の訓練はこれでおしまい。みんな、朝食をしっかりと食べて、午前の訓練に備えてね」

早朝訓練を終え、フォワード一同を一旦解散させた後、なのはも食堂へと向かった。まだ早いこの時間なら、『彼女達』はそこにいるはずだった。

「はやてちゃん、フェイトちゃん」

「おー、なのはちゃん。早朝訓練お疲れさま」

「あ、なのは……」

彼女達　はやてとフェイトは、そこそこのんびりした朝食を取っていた。

「ご一緒させてもらっね。……あれ、ヴィータちゃん達はどうしたの？」

「今日は皆忙しくてなあ。ヴィータとシグナムは朝から海上観測隊のところに出張や」

「昨日のガジェットについて、色々と用事があるんだって」

なのはは空いている席に座ると、お気に入りのモーニングセットを注文する。

「そっか、昨日の……まさか、撃ち漏らしとかなかったよね？」

「安心しい。ロングアーチのモニターにはそれらしいもんは映つたらなかったし、何よりなのはちゃん達がそないなミスをするはずがあらへんよ」

「なら良いんだけど……」

からからと笑うはやて。なのははどこかまだちょっぴり不安そうな表情ながらも、運ばれてきた料理を口にする。

「……なのは、ひょっとして何か困ってる？」

「ふえっ！？ フェイトちゃん、どうしてわかったの？」

「なんだか今日のなのは、いつもより元気なさそうだったから」

「にははは…… フェイトちゃんにはお見通しだね」

フェイトの言葉に、照れ臭そうにはにかむのは。

「それで、天下無敵なのはちゃんはいったい何をそんなに悩んでいるん？」

「うん、実はね……」

なのはは箸を進めながら、ティアナについて感じた違和感を掻い摘んで二人に説明した。

「ティアナが……？」

「んー、なのはちゃんがそう言うてるんやし、何かの見間違い、ちゆうこともないんやろなあ」

「うん。初め見たときはびっくりしちゃった。だって、これから直していきこうって思ってたティアナの悪い癖が、殆んど直ってたし……」

「うーん、と頭を抱えてしまう三人娘。」

「けど、あのくらいの子ならいきなり急成長、なんてことも珍しく

ないと思うよ？ …… 私は実際に見てないから、まだなんとも言えないんだけど……」

「そやな。ティアナはまだ若いんやし、本人もわかつとらんかったような才能が開花したのかもしれんよ？」

「そう、なのかなぁ？」

わたしの教導つて、役に立ってるのかなあ。ポジティブな親友二人の意見に、本気でそう考えてしまうのはだった。

午前の訓練では、ティアナは努めて手を抜いて行うように心掛けた。手を抜くなど、万一なのは知れたら言語道断で制裁を受けるような行為だが、今はティアナの特殊すぎる身の上がそうさせざるを得ない、というのが現実だった。

しかも今朝以来なのは特にティアナを注視しているらしく、ティアナにとっては色々な意味でプレッシャーとなっているのだった。

「はい、みんな集まってー！」

そして今。午後の訓練も中盤に差し掛かった頃、ついに本日最大の試験が始まるうとしていた。

なのはの号令に集まったフォワード一同が目にしたのは、ズラリ

と一列に並んだ隊長陣の姿だった。

「今日は隊長戦をするよ。みんな、まだ付いてくれる？」

「……………はいっ！」「……………」

口では威勢の良い返事をするものの、ティアナは内心、この実戦により近い訓練を危惧していた。

実戦に近い、それは即ち、手を抜くことが難しいとも言える。もちろんわざと被弾して早期撃墜される、という手も無いわけではないが、流石にそんなことをすれば、手抜きをしていることが一発でバレてしまう。

どうしたものか……。ティアナは必死に頭を巡らせるのだった。

『フェイトちゃん、わたしが今朝言ったこと、覚えてる？』

一方のなのは達は、念話にて秘密の会話中。内容は、勿論ティアナについてだった。

『うん、なのは。ティアナが不自然なくらい強くなってるんだよね？』

『そうなの。今朝以降は目立った動きは無いんだけど、やっぱり気になるから』

『わかった。私もよく見ておくね』

『お願いね。えっと、ヴィータちゃんとシグナムさんは……………』



『話は聞かせてもらったぞ。まさかそこまで強くなってるってのは信じられねえが、まあ、あたしとアイゼンがこの目で見極めてやるさ』

『私はたえ何があるうと、ただ目の前の相手を斬る。それだけだ』

『にやはは……』

いつも通りの二人に、苦笑するなのは。

ティアナに（とっては不本意な）注目が集まる中、今、戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

## 訓練とプチ疑念（後書き）

どうもこんにちは、風刻というものです。

今までともに後書きを書いていなかったわけですが……その姿勢を反省して、今回からは書いていこうと思います。

ということでも、作品について弁明じみたことをさせていただきます。

作中で細部の描写が原作と違ってありますが、作者の勝手な都合です。申し訳ありませんm（――）m 決してうる覚えだったとかではございません

あと、影が薄いキャラが何人かいますが（エリキャラ等）これから改善していく予定なので、どうか辛抱強くお付き合い下さい。

次回は隊長戦と、ティアナのホームシックを予定しています。不定期更新ですが、気長にお待ちください。

では、感想などお待ちしております。

## 隊長戦（前書き）

隊長戦の描写が予想以上に多くなってしまったので、ティアナのホームシックは次回へ持ち越します。

## 隊長戦

清々しいほどに晴れ渡った空の下、ティアナ達フォワード陣は、来るべき隊長戦に備えて、ブリーフィングをこれでもかというくらいに行っていた。

「じゃ、あたし達の作戦をもう一度確認するわよ」

ティアナが仲間の顔を見回して言った。

「砲撃を撃たれると厄介だから、スバルはなのはさんの氣を出来るだけ引いてて。くれぐれも無理して撃墜されないように」

「オツケー、任せて！」

「エリオは一撃離脱の高機動戦闘に終始。あたしやキャロ、ルナなんかを狙うフェイト隊長達を妨害」

「はい、頑張ります！」

「キャロはスバルとエリオの強化をお願い。特にエリオにはスピード重視。勿論、余裕があれば他のみんなの支援もね」

「は、はい、頑張ってみます！」

「ルナは砲撃と射撃を使い分けて、エリオ達の対処に夢中になってる相手を不意打ち。出来るだけ相手に見つからないように。……誤射しないですよ？」

「了解。やれるだけやってみるわ」

「で、あたしは必要な指示を出しながら射撃でサポート。具体的には二対一なんていう状況にならないように妨害をしたり、挟み撃ちで一気に畳み掛けたりね。何か質問は？」

ティアナはもう一度全員を見回すが、どうやらこの作戦で納得してくれたようだった。だが優秀な指揮官は、士気が落ちない程度に作戦の穴についての説明をすることも役割なわけで。

「後、薄々わかってると思うけど、一つこの作戦の難点を挙げるとしたら、とにかく火力不足だってこと。対策としては、こっちの戦力を集中しての各個撃破が一番有効。だから決定的なチャンスにはこっちから攻撃指示とかは出すけど、基本は防御を固めながら各自が相手の隙を探して、逃さずそこを突く。いいわね？」

「……了解！」「……」

頼もしい返事に、自然と笑みが零れる。ふと隊長達の方を見てみると、あちらはもう準備万端のようだった。

「じゃあ最後にルールの確認をするよ。わたし達隊長チームは一撃でも入れられたら撃墜。フォワードチーム全員が撃墜されるか、隊長チーム全員が撃墜されたら試合修了。みんな、準備はいい？」

静かな訓練場に相對する、フォワード一同と隊長陣。両者ともに真剣な面持ちで、訓練とはいえ、どちらも本気なのだということが如実に物語っていた。

「レディー……」

全員が来るべき時に備えて身構える。一瞬の緊張が走り、そして

「……ゴー！」

戦いが、始まった。

「うおおおおッ!!」

「甘いよ、スバル！」

ウイングロードを駆けてきたスバルの、速度を乗せた強烈な一撃。なのはそれを冷静にプロテクションで受け止め、アクセルシューターを操り反撃を入れようとする。

だが、攻撃が失敗したと見るや否や、スバルは一目散に退避。シューターはどこからか飛んできたティアナの魔弾に相殺されてしまう。

「なんだか、今日はみんな消極的だなあ」

一息ついたなのは、警戒がてら周りの様子を見渡してみる。

パツと見て一番目立つのは、場内を縦横無尽に駆け回るエリオの姿。キャラの強化魔法が掛けているのか、機動力はずば抜けて高い。後衛を攻撃しようとするヴィータやシグナムに、そのスピードをもつて攻撃を繰り返している。ただ、どれもバリアジャケットに一撃入るような重いものではなく、単に相手の気を逸らす為の牽制のようだった。おまけに、そんな煮え切らないような態度をとり続けるエリオにヴィータが痺れを切らして決戦を挑めば、そんな彼女の背後に向かって、ここぞとばかりに砲撃やら射撃やらが飛んでくる。無論ヴィータがそんなことでやられるわけではないのだが、一連の「いやがらせ」が彼女を苛々させているのは確かだった。

シグナムはシグナムで、時折現れる幻影に悩まされているようだった。エリオの妨害が途切れた時を狙ってキャラに接近するも、斬ったと思えば幻影で、おまけに出所不明の射撃魔法による集中砲火を受ける始末。それに対処したと思えば今度はエリオの不意打ち気味の一撃。端から見ても恐ろしく戦いにくそうだった。

そして、スバルが度々ちょっかいをかけてくるせいで、なのはが二人への支援が中々出来ないでいるのも、この膠着状況に拍車をかけていた。

「やっぱり、ティアナだよね……」

スバルやエリオの性格からして、ここまでいやらしい戦い方を好むとは思えない。となると十中八九、ティアナの発案だろう。今は隠れているのか姿が見えない彼女は、流石はチームの中枢として抜擢されただけある。

幻術や射撃の使い方なども、まるで何度も実戦を経験してきたかのように巧妙で、なのはの抱いていた疑念を裏付けするものだった。はやての言う通り、これがティアナの隠された才能なのかもしれない。

再び突撃してこうとするスバルに注意を払いつつ、そんなこと

を考えていたのはであった。

一方、膠着状態の続く最前線を一步離れた林の中。低空での哨戒飛行をしているフェイトは、なのはのお願いに応えるべく、ティアナの姿を探し続けていた。

「……見つからない。もう三十分も経ちそうなのに」

バーチャルでの再現とはいえ本物そっくりの木々達は、潜んでいる者の身をすっかり隠す。ティアナが目立って大規模な攻撃をしかけていないのもあって、発見は困難を窮めていた。

諦めて前線に向かうか、とフェイトが考え始めたとき、彼女の近くの空に向かって、唐突に蒼白い砲撃魔法が放たれた。狙いはスバルと小競り合いを繰り返しているなのはで、撃墜こそしなかったものの、スバルが逃走する隙を作るには十分な威力だった。

（あれは、ルナの……？）

フェイトは速度を上げて、砲撃の発射地点に急ぐ。

やがて茂みの先に、銀の弓を構え、再び誰かに狙いを定めているルナを発見。再度の砲撃を阻止すべく、フェイトはフォトンランサーをルナの背中目掛けて撃ち放った。

「！」

だが、直前で感付かれたのか、横方向へ転がるようにして雷弾をかわすルナ。



振り返ってフェイトの姿を確認したルナは、苦々しげな表情で舌打ちをした。

「テストロッサ隊長……」

「林に隠れて前線支援。中々いい作戦だね」

「……考えたのは、ティアナですから」

そう言っ、ルナはフェイトに弓を向ける。応じて、フェイトもバルディッシュを構える。

「……いくよ」

『H a k e n f r o m .』

刹那、フェイトは鎌状の魔力刃を展開、持ち前のスピードでルナに接近、そのまま斬りかかる。

だが、フェイトの攻撃を見越していたのか、ルナは初撃を余裕を持って回避する。そして逆に、至近距離から八発の誘導魔力弾を放つ。

虚を突く形の攻勢で短期決戦に持ち込もうとしていたフェイトは、ルナの予想外の抵抗に戦術変更を余儀なくされた。自らに迫る魔力弾を切り裂き、あるいはラウンドシールドで防御しつつ、ルナに再度の攻撃を試みる。

「ムーンライトカノン！」

チャージ時間の短い、ルナオリジナルの砲撃魔法がフェイト迎撃に放射される。だが、高機動戦闘を得意とするフェイトは、それを

難なく回避。そのままルナの真横に回り込み、無防備な彼女を真一文字に薙ぎ払った。

「っあ！」

咄嗟にシールドを展開したルナだったが、それでは到底フェイトの勢いを殺しきることは出来ず、あえなくシールドは破壊。吹き飛ばされたルナは木に激突。そこに間髪入れず、フェイトはフォトンランサーを数発、止めとばかりに撃ち放つ。

対して、ルナはダメージを負いつつも魔力弾を生成、フォトンランサーと相殺させてギリギリ直撃を回避。

「やるね、ルナ」

「訓練の賜物です」

そして、再び対峙する形となったルナとフェイト。意外にも、先手を打ったのはルナの方だった。

「クレセントスラッシャー！」

「！」

ルナの手から三日月状の魔力刃が放たれる。虚を突こうとして逆に突かれてしまったフェイトは、ブーメランのように回転しながら高速で飛来する魔力刃を、間一髪バルディッシュで受け止める。

「ルナティックアロー！」

続いて迫り来る矢の嵐。魔力刃を弾き飛ばしたフェイトは、今度

はそちらの対処に追われてしまう。一撃でも貰えばアウトのフェイトにとって、無数の矢が勝手な軌道を描いて飛んでくるこの魔法は、特に対応が難しいものの一つだった。自らの展開する防壁の中で足止めされたフェイトは、ルナの次の一手を予測しつつ、反撃の時を待つ。

やがて嵐が途切れると、フェイトはルナに攻撃を仕掛けるべく飛び出した。そんな彼女を、ルナの近距離砲撃が襲う。だがこの瞬間、二人の勝敗は決した。

『S o n i c   m o v e . 』

フェイトは砲撃を一瞬の加速で回避すると、反動で動けないルナ目掛けて、バルディッシュの刃を降り下ろす。

シールドすら張れず、魔力刃を直に受けてしまったルナは、膝をつきその場に崩れ落ちた。

「ルナ！」

そんな彼女を、慌てて抱き起こすフェイト。

「ごめん、痛かった……よね？　大丈夫？」

「……はい、平気です。魔力ダメージが響いただけですから」

不安げにデバイスの設定を確認するフェイトに、ルナは苦笑して言った。

「そっか、よかった。ルナ、戦いかた上手くなったよね。あの近接戦の魔法、クレセントスラッシャーだっけ。ちよっとびっくりしちゃった」

「ありがとうございます。……テストロッサ隊長のものを参考にしましたので」

ルナはよろよろと立ち上がると、訓練場の外に向けて歩き出す。

「ルナ、大丈夫？ 肩貸そうか？」

「心配しないで下さい。大丈夫ですから」

「そう……じゃあ、気を付けてね」

「お気遣いありがとうございます。隊長も、ご武運を」

そう言い残して、ルナは林の奥へと消えて行く。フェイトはその後ろ姿を確認してから、再びティアナ搜索の警戒飛行を開始した。模擬戦開始から三十分余り。ティアナの敷いた布陣に綻びが生じた瞬間だった。

『ごめんなさい、テストロッサ隊長にやられちゃった』

ルナの念話がフォワードチーム全員に届けられたのは、それからすぐのことだった。

『あの、気にしないでください。フェイトさん、強いですから……』

『ルナさん、お疲れ様です。砲射撃支援助かりました』

『お疲れー。後はあたし達に任せて、ルナはゆつくり休んでて!』

三者三様の反応を見せるフォワードチーム。だが、何故かティアナからの連絡がない。

『ええ、みんなありがとう。それじゃ、私は早めに退場させてもらうわ。……えっと、ティアナ?』

『……うん、お疲れ様、ルナ。フェイト隊長の動向が分かっただけでも結果オーライ。それとお疲れ様ついでに、全員に連絡ね。ルナが抜けちゃったから少し作戦変更。あたしが前線に出るから、みんなフォローお願い』

しばらくしてなされた、ティアナからの業務連絡。その声音には焦りの色が浮かんでいた。

今ティアナがいるのは、隊長チームの誰とも決定的な接触を避けられる距離にある、小さな木立の一角。自らは支援に徹するつもりでいたティアナだったが、隊長チームの予想以上の防御能力の高さに、当初予定していた一斉攻撃をする機会もないまま、チームメンバーの撃墜という事態を招いてしまった。

ルナが脱落したことにより、前線で張っている二人の負担は格段に増した。元々ギリギリで動いていたスバル達の疲労は凄まじく、このままでは撃墜は時間の問題だと感じたティアナは、自ら前線で戦うことを決意したのだった。

(どのみち、ここに留まったらフェイトさんにやられそうだしね)

ルナがやられたということは、フェイトはこの林の中をひたすら索敵しているに違いない。じきにここにもやってくるだろう。

不意打ちでやられるよりも、自ら攻撃に参加してスバル達の負担を減らす。勝つためにはそれしかない。

大きく深呼吸したティアナは、エリオ達の戦っている前線へと駆け出した。彼女の頭には勝利への様々なシミュレーションが浮かび、そして消えていく。そこに「自重」の二文字は無く、ともすれば自分が平行世界から来たことさえも忘れていたのではないか、というほどに、ティアナはこの戦いにのめり込んでいた。

「はああああッ！！」

飛び上がり、相手上方からの一突き。完全な奇襲のつもりだったそれは、相手の俊敏な反応により受け止められてしまう。カウンター気味に振るわれる鉄槌を紙一重で避けながら、エリオはそろそろ限界に近いことを感じていた。

「どうした、エリオ！ 動きに覇気がねーぞ！」

「すみません、ヴィータ副隊長！」

「謝ってるヒマがあったら攻撃して、みろ！」

再び襲い来る鉄槌。それを大きく後ろに跳んでかわしたエリオは、ストラーダを中段に構え、

「スタールメツサー！」

刃に雷撃を付与した一撃を、追撃を仕掛けようとしていたヴィー

タのグラーフアイゼンに叩き込む。キャロのツインブーストが掛かっていない分威力は劣るが、それでもヴィータの連撃を止めるには十分だった。

魔力付与されたデバイスが打ち合ったことにより、エリオはその衝撃で後方に吹き飛ばされる。対するヴィータも、体勢は崩さないまでも大きくノックバックしてしまう。

「そろそろ引き際かな。キャロは……！」

エリオは持ち前の身軽さですぐさま体勢を整えると、一撃離脱の作戦通り、ヴィータを深追いせずにその場を離脱する。追撃を警戒しつつ周囲を確認した彼が目にしたのは、今にもシグナムに撃墜されそうになっているキャロの姿だった。

「キャロ！」

「Messerrangriff。」

ストラダを構え、一直線にシグナムへ突撃するエリオ。

「む、レヴァンティン！」

「Sturmwind。」

彼の気配を察知したシグナムの放った衝撃波が迫る。程なくして直撃するも、エリオはメッサーアングリフの勢いを以てそれを突き抜け、シグナム目掛けて突っ込んだ。

だがシグナムは直前でパンツァーシルトを展開。陣風で勢いの削がれたエリオを受け止め、弾き返す。そして体勢を崩したエリオに、容赦無く斬撃を加える。

「くあッ！」

防御仕切れず地に叩きつけられるエリオ。そんな彼に止めを刺そうと、シグナムはレヴァンティンを構え直す。

「紫電……一閃！」

「エリオくん、危ない！」

『Protection.』

シグナムの放った炎熱の斬撃を、間に飛び込んだキャロのプロテクションが防ぐ。なのは直伝の守りの魔法は、見事に紫電一閃を止めて見せた。

「あ……ありがとう、キャロ」

「ほう、中々やるな。流石なのはに仕込まれているだけある」

体勢を立て直したエリオは、キャロと共にシグナムと相對する。斬るか斬られるか、緊迫の時間が流れ、

「シュワルベフリーゲン！」

「！？」

突如後方からヴィータの射撃魔法が飛来。シグナムとの戦いに全集中力を注ぎ込んでいたエリオ達は、ヴィータに対する警戒を完全に怠っていた。



弾き出された鉄球は直撃コース。避けようにも少しでも隙を見せればシグナムの攻撃に晒される。エリオとキャロ、少なくともどちらかの撃墜を覚悟した、その時。

「シュート！」

不意に飛来した十二発のオレンジ色の魔力弾が、ヴィータのシュワルベフリーゲンを相殺。更に残りの誘導弾がシグナムとヴィータに襲い掛かる。

それから時を置かずして、ティアナが林の中から飛び出してきた。

「ごめん、二人ともお待たせ！」

「ティアさん！」

「ヴィータ副隊長はあたしが相手するから、あなた達はシグナム副隊長をお願い！」

現れたティアナは、エリオ達にそれだけ指示すると、自らはヴィータと対峙する。

「誘導弾十二発の同時操作か。なるほど、なのはが驚いてたのも頷ける話だ。……それが張りぼてに過ぎねーのか歴とした実力なのか、この鉄槌の騎士ヴィータがしっかり見極めてやるーじゃねーか」

ティアナにグラーファイゼンを突き付けながら、ヴィータは不敵に笑ったのだった。

地上でエリオ達が奮戦している時、空ではスバルによる絶え間ない牽制が続いていた。

「リボルバーキャノン！」

スバルの放つ拳が、なのはの魔法障壁に阻まれる。対象に圧倒的な破壊効果を及ぼすスバルの技を、魔力リミッターというハンデ付きで防ぐには、なのはと謂えどもかなりの集中を要する。とてもではないが地上への本格的な支援をするだけの余裕はなかった。おまけにスバルの常人以上の体力が、この牽制攻撃を長時間に渡って継続させていた。

（このままだと地上が危ないかな。出来ればまずスバルから墜としたいんだけど……）

無論なのはの実力を以てすれば、まだまだ未熟者に過ぎないスバルの一人や二人、簡単に撃墜してみせるだろう。ただ、なのはにはそれを実行出来ない理由があった。

（どうしても、ティアナの動きが気になるんだよね）

先程から時たま飛来するティアナの魔力弾。見かける度に撃ち落とすようにはしているが、その動きがまるで自分の隙を伺っているかのようなので、なのはは思い切った行動に移れないでいたのだった。

（どうしようかなあ……）

『なのは』

悩むなのはに、不意に念話が入る。フェイトからのものだった。

『どうしたの、フェイトちゃん』

『さつきルナを撃墜したんだけど、なのは、何だか苦戦してる？』

『うーん、苦戦っていうより、少し動きにくくて。あ、そうだ。フェイトちゃん、ちょっと援護してくれる？』

『援護？』

『うん。ティアナに狙われてるわたしの代わりに、スバルを撃墜してほしいの。頼まれてくれる？』

『わかった、今そつちに急行するね』

スバルが突撃してきたことにより、フェイトとの念話はそこで途切れた。

ウイングロードを疾走してくるスバルの迎撃

に、アクセルシューターより速度・威力共に劣るも、その分機動や他の魔法に余力を割けるディバインシューターを放つ。ディバインバスターと並んでなのはが9歳の頃から慣れ親しんでいるこの魔法は、彼女にとつてはまるで息をするかのように扱えるものだった。

一発、二発なら簡単に防御出来る代物も、十を越える数となると話は違ってくる。それが熟練の魔導師に操作されたものならば尚更だ。スバルは初めの数発は防御したものの、いよいよ弾幕が激しくなると、効果範囲外へ撤退せざるを得なかった。

そしてそんなスバルの背を追う、一筋の金色の光。スバルが気付いた時には、それはもう目前に迫っていた。

雷の大鎌が、スバルの体を捕らえる。同時にディフェンサーが発

動し、加えて防御姿勢を取っていたスバルは、衝撃でかなり軌道を逸らされるも、なんとか撃墜はされずにいた。

「くっつ……ふ、フェイト執務官……！」

ただ、やはり負ったダメージは無視できないものがある。次に大きな一撃を受ければ、今度こそ撃墜は免れない。

スバルはトップスピードでウイングロードを疾駆する。対するフェイトも、自身の高機動性を生かしてスバルに並走する。

再び振るわれるバルディッシュ。それをリボルバーナックルで掴み取ると、カウンターで蹴りを繰り出す。続いて空いている手で魔力を込めた拳。シューティングアーツの得意なスバルにとっては、得物を封じられた戦いには一日の長があった。

だが、フェイトも黙ってやられる訳ではない。無詠唱でフォトンスフィアを生成すると、ただでさえ高速のフォトンランサーを、至近距離からスバルに発射する。結果は無論直撃。スバルはウイングロードから投げ出され、重力に任せて自然落下する。

しかし、それも一瞬のこと。すぐさま道を張り直すと、フェイトに向かって一直線に方向修正。短距離突撃を開始する。まさかここまで早く攻撃に転じるとは思っていなかったフェイトは、ほんの僅か初動が遅れ、それが致命的なミスとなった。スピードに特化したフェイトの防御能力では、到底スバルの拳を耐えることは出来ない。

「リボルバー……」

高まる緊張。決まれば勝利のこの一撃に、スバルは全身全霊で臨み、

「シュー」

だが、その拳がフェイトに触れることは遂になかった。レストリクトロック。設置型の強力なバインドが、スバルをフェイトの目前で拘束していた。

「これって、なのはさんの……！」

「残念だったね、スバル」

「そ、そんなあ……」

ガクツと頂垂れるスバル。この状況では、どうあがいたってスバルに勝ち目などない。実質的な撃墜だった。

撃墜判定を受けたスバルはバインドから解放され、フェイトと共になのはの元に向かう。

「二人ともお疲れ様。援護ありがとう、フェイトちゃん」

「ううん、こっちこそありがとう。ちょっと油断しちゃったから、なのはの援護がなかったら、きつと負けてた。……スバルも、そんなに落ち込まないで？」

「そうだよ、スバル。ここから見てたけど、スバルはちゃんと強くなってるんだから。次、また頑張ろう」

「はい……でも、悔しいものは悔しいです」

フォローしてくれる隊長二人に、スバルは少し拗ねた調子で答える。それを聞いたなのは達は、顔を見合わせてクスクスと笑った。

「大丈夫、スバルはもっと強くなれる。いつかきつと、わたしやフ

エイトちゃんとも互角に戦えるようになるはずだよ」

「うん、私もそう思う。だから今はこの悔しさをバネにして、なのは隊長の教導をしつかり吸収しよう?」

「そ、そうですか?　くうくつ、隊長達にそう言われると元気でちやいますね!」

単純と言つべきか、コロツと態度を変えて上機嫌になるスバル。

「それじゃあたし、隊長達の邪魔にならないように隅の方で待機してますね!」

上機嫌のまま、スバルは地上へと駆け降りていく。なのは達はその様子を微笑ましく見ていたが、スバルと入れ違いに視界に映り込んだ人影が、なのは達の表情を一変させる。

「なのは、あれ……」

「うん。ティアナだね」

林の中から現れたティアナは、交戦中のエリオ達を見ると、立ち止まって魔法陣を展開。ティアナの十八番とも言える魔法、クロスファイヤーシュートを放ち、エリオ達に奇襲をかけたヴィータの射撃魔法を相殺した。

「私、ちよつとシグナム達を援護しに……」

「待って、フエイトちゃん」

加勢しに行こうとしたフェイトを制止するのは。

「もうちょっとだけ、様子を見よう」

そう言うなのは目は、しっかりとティアナのことを注視していた。まるで、化けて出た魔物の正体を見破ってやるつもりでも言うかのように。

「いくぞ！ ラケーテンハンマー！」

先に仕掛けたのはヴィータだった。

ロケットエンジンの如き機構で推進力を得たヴィータは回転しながら加速し、ティアナに鉄槌を叩き込むべく突貫する。

ヴィータの攻撃に小手先の防御が役に立たないことを嫌というほど知っているティアナは、文字通り「必死」に回避する。代わりに犠牲となったバーチャルの木が、凄まじい音を立てて折れ飛んだ。

その恐ろしい光景に冷や汗を垂らしながらも、ティアナは冷静にヴァリアブルバレットを三発撃ち込む。バリアやAMFを突破することを主目的とする多重弾殻射撃は、土埃で視界が悪くなっている中でも、正確にヴィータを狙っていた。

「なめんなっ！」

「!？」

だがヴィータは、それを待つてましたとばかりに、野球よろしく次々とグラーファイゼンで打ち返す。一発目と二発目が相殺、三発目はあろうことかティアナに向かって飛んできた。

予想外の対応に驚いたティアナだが、慌てて防御行動をとるようなことはせず、地面に倒れこむような形で回避する。対処に時間のかかる多重弾殻弾を防御すれば、次の瞬間には鉄槌の鎗になることは目に見えている。そんなことはご勘弁願いたいティアナには、多少無理をしても避ける必要があった。

そんなティアナを、ヴィータのテートリヒ・シユラークが襲う。単純な殴打だが一撃一撃が破壊的な威力を持っているので、当たればひとたまりも無い。

一撃、二撃、鉄槌が振るわれる度に大きく陥没する地面。ティアナは紙一重で避けきると、射撃で牽制を加えながら林の中に逃げ込む。逃がしてなるものとそれを追うヴィータ。

「いない……？ くそっ、どこに行きやがった」

だが、後を追ってきたヴィータは、見事にティアナの姿を見失ってしまった。一旦心を落ち着かせ、五感を研ぎ澄ませるヴィータ。微かに落ち葉を踏みしめる音がした。

「！ そこだっ！」

刹那、単発の鉄球を音源に撃ち込む。コンマ数秒で目標地点に着弾したそれは、轟音を立てて炸裂する。

そして一瞬の後、ヴィータが目にしたのは撃墜されたティアナではなく、己を包囲したオレンジ色の魔力弾の群れだった。

（！？ 畜生、嵌められた！）



ヴィータは反射的にパンツァーヒンダネスを展開。直後、魔力弾が一斉にヴィータへと襲いかかる。

爆発に次ぐ爆発。衝撃で震えるバリア。時間にして僅か数秒間、しかし体感ではずっと長く感じる攻撃を耐えきったヴィータは、しかしそれで油断せずにすぐさま周囲を見渡す。標的はすぐに見つかった。

「シュワルベフリーゲン！」

四発、そしてまた四発、合計八発の鉄球がティアナの隠れていた場所に着弾する。

直撃を恐れたティアナは、堪らずヴィータの前に姿を現す。ニヤリと笑うヴィータ。

「トラップなあ、おもしれーことしてくれるじゃんか、ティアナ」

「あんなに弾幕を張ったのに落ちない副隊長も副隊長です」

「はん、こちらら部下に簡単にやられるわけにはいかねーんだよ」

しばしの睨み合いの後、ヴィータは高速でティアナとの間合いを詰める。同時に、ティアナは生成した魔力弾を撃ち出す。

撃たれた魔力弾は、しかし、ヴィータを捉えることはなかった。というより、そもそも彼女を狙ってすらいなかった。

「な……！」

魔力弾はティアナの足元の地面で炸裂。もうもつとした砂煙を巻き起こす。目眩ましをされたヴィータはやみくもに突撃するわけに

もいかず、その場で齒噛みするしかなかった。そして煙が晴れた時、ヴィータは自らの視界に飛び込んできた光景に目を丸くした。

シューティングシルエット。現実と虚構の交錯が織り成す、攻防一体の奥義。茂みの中から木の上まで、沢山のティアナが銃を構えてヴィータに狙いを定めていた。どれが本物なのか、どれが偽者なのかを判断する間もなく、総攻撃は開始された。

周囲三六 度から飛来する魔力弾。その全てが本物というわけではないが、一瞬では判断がつかないため、結果的に全て避けざるを得ない。つまり無駄な労力を使う、ということは、ヴィータにとってかなりの負担となっていた。

「くそっ、幻術なんてめんどくせーもん使いやがって……なら、こっちにも考えがある！」

たん、と一飛びで空中へと舞い上がる。真贋入り交じった魔力弾が空中のヴィータを狙うも、空中で機動力が上がった彼女相手に、全て易々と避けられてしまう。

「アイゼン！」

『G i g a n t f o r m 』

グラーファイゼンが、ヴィータの掛け声と同時に彼女の体格の何倍もある巨槌に変貌する。ヴィータはそれを盾のようにして魔力弾を防ぎながら、そのまま眼下に向かって突撃する。

「爆ぜろ！ ギガントハンマー！！」

グラーファイゼンが接地した瞬間、そのとてつもない破壊力により轟くような地響きと周囲一帯に広がる衝撃波が発生。ティアナの

シューティングシルエットは、その天をも揺るがすほどの衝撃を受け尽くし消え去った。

これほどの攻撃を受けては、幻影のみならずティアナ本人も決して無事では済まされない。衝撃波に巻き込まれた彼女は塵のように吹き飛ばされ、土埃の中に消える。

まるで隕石が落下したかのようなクレーターを残しつつ、ヴィータはゆらりと立ち上がる。圧倒的な火力を見せつけながらも、その目は勝利に勝ち誇るようなことは無い。

「おいティアナ、おめーこの程度でへばったとかいうんじゃないーだろーな！」

「まさか！ まだまだ行けます！」

煙の向こうで声がしたと思えば、ヴィータに向かって数発の魔力弾が飛来する。パンツァーシルトでそれを防ぎ、ヴィータは弾源とおぼしき場所に鉄球を撃ち込む。が、明確な手応えはない。

舌打ちをするヴィータ。そんな彼女の背後に光る、オレンジ色の魔力光。ヴィータがそれに気付いた時には、既にティアナの準備は整っていた。

「ファントムブレイザー！！」

ティアナの魔法の中でも大威力を持つ砲撃が、ヴィータに向けて放たれる。オレンジ色の魔力は、寸分変わらず直撃コースを駆け抜けた。

（やった！？）

色々な条件が重なって撃つことが出来た、必殺の魔砲。ティアナ

が半ば勝利を確信した、その時、

「コメートフリーゲン！」

「!？」

不意にティアナの頭上から、巨大な鉄球が襲いかかる。砲撃の反動で動けないティアナは、一瞬自らの負けを悟った。

だが、幸い鉄球はほんの少しティアナから離れた場所に着弾。ティアナは爆風と破片の嵐を受けたものの、撃墜されはしなかった。

（あ、危なかった……っ！）

再びゲリラ戦を試みようとして、林に逃げ込もうとするティアナ。だが、右足の激痛がそれを制する。爆風に煽られた際に挫いたらしい。びっこをひくティアナを見て、ヴィータもその事実気付く。ハンを負った兵は的にしかならない。次の一撃が勝負を決すると踏んだヴィータは、渾身の力を込めて突撃する。

怪我で回避もままならない状態のティアナは、仕方なく迎え撃つ体勢に入る。ここまで追い詰められてもなお、その瞳は逆転勝利への可能性を見据えていた。

（ヴィータ副隊長相手に、あたしのバリアがどこまで持つかはわからない。けど一瞬でも耐えられるなら、その一瞬で一撃決める！）

「ぶち抜けえええッ!!」

目の前まで接近したヴィータが、容赦なく鉄槌を振る。ティアナが展開したバリアに、嫌な音を立てて亀裂が走る。

バリアが完全に破壊される前に、ティアナはクロスミラージュの

銃口に魔力刃を発生させる。  
てはトラウマ物の魔法。

ダガーブレード。ティアナにとっ

（届け、届け、届け！！）

バリアの亀裂が広がり、もうこれ以上の維持が不可能となったとき。決死の覚悟で振るわれたダガーブレードが、ヴィータの騎士甲冑を切り裂いた。

同時にバリアが破れ、ティアナに鉄槌の洗礼が訪れた。重い衝撃が体を刺し貫き、視界が黒く霞む。「勝った」という事実には漠然とした思いを抱きながら、ティアナの意識は急速に闇へと沈んでいったのだった。

## 隊長戦（後書き）

どうも、風刻です。拙作を読んで下さっている皆様、本当にありがとうございます。第五話はいかがだったでしょうか？ 結構戦闘描写を頑張って書いてみたんですが……改めて見ると凄いグダグダ感がorz

てなわけで、本編の話はこれくらいにして、今回は後書き欄を使っておリキャラのプロフィールを紹介したいと思います。何かとティアナ達に絡んだりしてますが、（主に作者の表現力不足により）イメージしづらいかと思いますので、ご参考に。

名前：ルナ＝モーロック

性別：女性

年齢：16らしい。元の世界と平行世界とで、何故か見た目がほとんど変わってない。……実は年m（殴

容姿：肩まで伸ばした銀髪に、少し厳しめの目付き。背はティアナより少し低い程度。

性格：本人はクールに振る舞おうとしてる。でも実際は結構感情の起伏が激しい。

魔導師ランク：ミッドチルダ空戦B

階級：二等空士

使用デバイス：非人格アームド「アルテミスボウ」。待機形態は三日月を模したペンダント。

バリアジャケット：元々は魔法使いの着るような真っ白いローブ。六課入隊と同時にライトニング仕様に（白いマントに濃い紫色をした半袖の上衣、それとセットのジャンパースカート。手甲などのオプション付き）

とまあ、こんな感じで。今のところいてもいなくてもいいような役柄の彼女ですが、これでも結構重要な人ですので、生暖かく見てやって下さい。

それでは、感想などお待ちしております。

## 夢が現か

新暦80年。ミッドチルダ首都クラナガン、八神邸。

スバルを初めとする六課前線メンバーは、休暇を利用してそこで一同に会していた。仕事の関係上、一人一人が会うことはちょこちよこあったが、こうして全員が揃うことはめったになかった。

「いやー、しかしティアも来ればよかったんだけどねー」

燦々と照りつける太陽のもと、波間にぶかぶかと浮かびながら、スバルはのんびりした口調でそう言った。

暑い日が続く今日この頃。集まった皆はひとしきり談笑した後、はやての提案で海でくつろぐことにしていたのだった。

「やっぱり、ティアさんがいないと寂しいですよね……せつかくみんなが集まったのに」

「まあ、ティアも暇じゃないからしょうがないんだけどさ」

隣を泳ぐキャロの残念そうな表情に、スバルは首をすくめてみせる。

ティアナの仕事が忙しいのはいつものことだった。特に最近では名が上がってきたのか、色々な事件に引っ張りだこになっているらしく、今回急に来れなくなってしまったのも、緊急の依頼があったせいだと聞く。

（……寂しいってのは勿論あるんだけどね）



スバルが小さく溜め息をついた時、先程から沖に出ていたエリオが、見事なクロールで戻ってきた。

「お帰りー。そっちはどうだった？」

「はい、もう魚の群れが凄く綺麗で……！ キャロもスバルさんも、絶対見た方がいいですよ！」

キラキラと目を輝かせて語るエリオ。その様子がまるで小さな子供のようで、スバル達は思わず笑ってしまう。

「えっと、あの、僕、何か変なこと言いましたか？」

「うん、背は大きくなったけど……あ、なんでもないなんでもない」

「ただ、そんなに綺麗なところなら、わたしも見てみたいなって」

「あ、キャロもそう思う？　なら……」

「もしもーし、三人とも、聞こえてる？」

そんなこんなで遊泳を満喫しているスバル達の脳裏に、なのはからの思念通話が届く。

『なのはさん、どうかしたんですか？』

『うん。はやてちゃんがね、西瓜を用意してくれたみたいなの。だから、一旦浜辺に帰ってきてくれる？』

『本当ですか！？ んんん、やったー！』

西瓜の話聞くや否や、スバルは物凄いスピードで浜辺に向かって泳ぎ出す。水飛沫を浴び、呆氣にとられるキャロとエリオ。

「……スバルさんって、時々子供みたいだね」

「え、あ、あはは……」

しばらくしてエリオの呟いた台詞に、キャロは内心想うところがありつつも、一応曖昧に笑って答えたのだった。

「わあゝ！ 美味しそうゝ！」

浜辺に設営された大テントの下、大きくて見るからに瑞々しそうな西瓜が六個、でんと机に置かれていた。

「どれもキンキンに冷えとるでー。さ、みんな遠慮せんと、どんどん食べてな」

はやてが得意気な顔でそう言う。だが、誰も手をつけようとしな

い。  
「？ どないしたん？ みんな食べひんの？」

「はやてちゃん、分かっているとは思っけど、まずは切らなくちゃ……」

「……あ」

まさかのシャマルから指摘を受け、しばらく呆けるはやて。  
畑から採れたまんまの西瓜を「食べて」と出されても、普通は反応に困るだけである。はやては笑って誤魔化しながら、手近にある刃物を探す。が、見つからない。

「なあ、シグナム」

「なんでしょうか、主はやて」

「レヴァンティン、ちょお貸してくれひん？」

この状況で剣（刃物）を貸してくれとは、はやての意図は火を見るよりも明らかだった。普段は主の命令に忠実なシグナムも、こればかりは返答に窮してしまう。

いやあな沈黙がしばし続いた後、おずおずと手を挙げる者が一人。

「あの……わたしが包丁とってきます」

「ホンマか？ おおきになあ、キャロ。ええ子には後でサービスや」

「は、はい、ありがとうございます」

はやてにちょこんと礼をしたキャロは、かわいらしい水着姿のまま、てくてくと八神邸へ歩いていった。

「えーっと、包丁、包丁……あ、あった」

八神邸、台所にて。がさごそと調理器具の類を漁るキャラ。日常的に使うものだけあって、お目当ての包丁はすぐに見つかった。それを持って浜辺に戻ろうとしたキャラだったが、不意に聞こえてきた人の話し声が、その足をはたと止めさせた。

『……以上、ミッドチルダ地上本部からお伝えしました。続いて……』

（ニュース？ テレビが付けっぱなしなのかな？）

どうせなら消していこう。そう思ったキャラは、モニターの設置されているリビングへ向かった。

（あ、やっぱり）

そしてキャラの思った通り、テレビモニターは無人の部屋でも精力的に仕事をしていた。

モニターを消そうとした彼女の目に、ちょうど流れていたニュースが目に残る。

『……サンジェルマン特派員のアリスさん、現地の情報はどうですか？』

（サンジェルマン？ それって確か、ティアさんが調査に行ってる世界だったような……）

キャラがそんなことを考えている内に、映像が整然としたスタジオから荒涼とした荒れ地へと移り変わる。

『はい、こちらサンジェルマン特派員のアリスです。つい先ほど入りました情報によりますと、現在確認されている失踪者は、エーリツヒ＝ラインラント執務官、ハルミ＝ラインラント執務官補、そして今回新たに行方不明となったティアナ＝ランスター執務官の三名で、これに対し本局側は「全力で不明者の捜索に当たる」という旨の発表をするに止まっていますが、依然捜索は難航中で、本局内部からは「現地の状況を鑑みると三名の生存はもはや絶望的」との見方も  
』

モニターが消える。思わず取り落とした包丁が、その小さな足に突き刺さりそうだったのだが、気付かない。自らの心配などとしていられないほど、キャラは動揺していた。

ゆっくりと胸に手を当てる。まだ心臓が早鐘を打っている。ランスター執務官。行方不明。捜索は難航。生存は絶望的。そんな言葉達がキャラの脳裏をぐるぐると回っては、彼女の心を揺さぶっている。

（どうしよう、どうしよう、ティアさんが行方不明なんて……！  
は、早くみんなに伝えないと！）

いてもたってもいられなくなったキャラは、包丁のことなどはすっかり忘れ、この悪夢のような情報を持って八神邸を飛び出した。

「あ、キャラが戻ってきた！　おーい……って、あれ？」

駆けてくるキャラに手を振るスバル。だが、すぐにその様子がおかしいことに気付く。包丁を取りに行っていたはずのキャラは何故か手ぶらで、その表情は今にも泣き出しそうで。

キャラはテントまでたどり着くと、困惑する一同に向かって、必死の様相で訴える。

「ティアさんが……ティアさんが、大変なんです！　ああ、早くしないと、早くしないとティアさんが……！」

「キャラ、大丈夫。大丈夫だから、まずは深呼吸して落ち着いて」

尋常ではないほど取り乱したキャラを、フェイトが優しく宥める。そうしてようやく落ち着きを取り戻したキャラに、ゆっくりと尋ねる。

「それで、ティアナがどうしたの？」

「は、はい……あの、さっきニュースでティアさんが担当している事件のことを紹介していたんですけど……」

「ティアナの担当している事件……サンジェルマンのロストログア調査だね」

ティアナが律儀にも全員に謝罪メールを送っていたので、このことはみんな知っている。キャラは頷くと、思わず震えだしそうにな

るのを堪えながら、端的にこう言った。「そこで、そこでティアさんが……失踪、したって」

失踪。その言葉を聞いた瞬間、凍り付くような衝撃がスバル達の間走った。

「えっと、キャラ……それ、冗談だよな」

スバルは、この悪夢のような情報がキャラの悪い悪戯であることを願い、恐る恐る呟く。だが、その望みはキャラが力なく首を横に振ったことにより霧散した。

「それに……本局の人が、せ、生存は、絶望的っ、て」

そこまで話して砂上に崩れ落ち、涙を堪えきれずにしゃくりあげるキャラを、フェイトとエリオがそっと労ってやる。

「もしもし、本局捜査部ですか？ 特別捜査官の八神です。……あ、プライベートなんで格好は気にせんといて下さい。それより、サンジェルマンでのロストロギア事件の件なんですが、はあ、ではその情報に間違いはないんですね？ ……わかりました」

そしてキャラの話の聞き、いち早く真偽の確認をとっていたはやて。しばらく険しい表情でオペレーターと会話を続けていたが、通信を切断してすぐ「あかん、これはあかんよ」と、仲間の不安げな眼差しを浴びながら、沈痛な面持ちで呟く。

鉛のような沈黙。キャラのすすり泣く声だけが聞こえる、暑い夏の浜辺。

「……あたし、行ってきます」

凜とした声に、俯いていた顔を上げる。毅然とした決意を秘めたスバルが、そこにいた。

「ティアはいなくなっちゃっただけで、まだもう会えないと決まったわけじゃないんですね。……だったら、あたしが捜しに行きます。あたしが、ティアを助けます！」

彼女の力強い言葉に、キャロが涙を拭いて立ち上がる。

「……わたしも、スバルさんと同じ気持ちです。役に立てるかはわからないけど、ティアさんのために、出来ることをしたいから」

「ティアさんは、僕達の大切な仲間です。六課の時には何度もピンチを救ってもらいました。今度は、僕達がティアさんを助ける番です」

それに続く形でエリオも宣言する。

スバル達の勇ましい様子に、元隊長達是否応にもあの時から長い時が流れたことを感ぜざるを得なかった。面子は同じでも、中身は二回りも三回りも成長していたのだ。

「……そうか。それでこそあたしらの教え子だ。おめーらがやるって言っただ。もちろん、あたしも出来る限りの手を尽くす」

「私も微力ながら手伝おう。敵を斬ることしか出来ない私でも、役立つことはあるだろうからな」

元副隊長達も、その心意気を汲み取ったのか、協力を申し出る。隊長達は言わずもなだった。



スバル達は一旦八神邸に戻って各々が必要な連絡をとった後、八神特別捜査官とテストロッサ執務官の協力者という形で、一路サンジェルマンへと向かったのだった。

(……っ、ここは……？)

うつすらと目を開けると、見慣れない石天井がぼやけた視界に映り込んだ。起き上がって辺りを見回してみると、どこか見覚えのある光景で。部屋の中央に淡く光を放つ魔導書を見つけて、ティアナはここが何処なのかを悟った。

(……！ ウィーナ遺跡！？)

ティアナは魔導書に駆け寄る。それは相変わらず幻想的な光を湛え、ともすれば魅了されてしまいそうなほどの何かを持っていた。スツと無意識に手を伸ばすティアナ。いけない、と頭が理解した時には、もう魔導書に触れようとしていた。

(……え？)

だが、そのティアナが魔導書に触れることはなかった。半透明をした彼女の手は魔導書の表紙を突き抜け、向こう側へ飛び出していたのだ。

二重のショックで、かん高い叫び声を上げて飛び退くティアナ。

慌てて自らの姿を見直すと、薄く透けた産まれたままの自分がそこにあった。誰もいないことはわかってはいたものの、反射的に体を隠してしまう。

（こ、こここれは一体どうなってるのよ!？）

予想外の事態に面食らう反面、頭の片隅では、今の状況を冷静に分析している彼女がいた。

まず、半透明という幽霊のような見た目からして、ティアナの体は実体を持っていない可能性が大きい。魔導書を手がすり抜けたことが、その仮説に根拠を与えている。

次に、この場所について。周囲の景観や魔導書からここがウィーナ遺跡であることに間違いはなく、ティアナはその最深部に一人でいたことになる。それも、実体をなくした姿で。

（ひょっとして、あたし……死んだの？）

ティアナの最後の記憶は、ヴィータのグラーファイゼンに意識を刈り取られた所で終わっている。今のティアナの状態が、パンタシアによって変換された意識体であり、依り代となっていた「向こう」のティアナの体に何かトラブルが起こってユニゾン（仮）が維持出来なくなり、元の世界に戻された。いかにもあり得そうな話ではある。

（まさかね……）

ひきつつた笑みを浮かべるティアナ。とりあえず、今は信ずるに足る情報が欲しかった。既存の知識だけでは、この状況を正確に把握するのは不可能に近い。

（まず、観測所に行ってみないと）

ティアナはふわりと浮き上がると、遺跡の天井を通り抜けて外へと飛び出す。その際の奇妙な息の詰まるような感覚に、ディーブダイバーとはこんなものかと、妙に納得したりした。

外は地も空も相変わらず砂塵にまみれていて、不毛の土地という言葉が最高に似合っていた。これまた最高に悪い視界の中を、ティアナは観測所目指して飛んで行った。

観測所周辺は、多くの人員でこつた返していた。本局からしき調査部隊に物資の補給部隊。武装局員の姿の他、民間のメディアまでいる。観測所周辺には臨時の隊舎まで建てられており、ティアナが知らない間に、ことはかなり大きくなっているようだった。

そして、幽霊のような存在とはいえティアナは裸一貫であり、老若男女入り交じった人の群れを前にして、当然のことながら羞恥心に襲われる。

（な、なにか着るものは……）

ダメ元で不毛の荒野を見渡す。服とは言わずともせめて何か体を隠すものが欲しかったのだが、あるのは役に立ちそうもない枯れ木枯れ草ばかり。どうしようかと思案に暮れるティアナだったが、不思議なことに彼女はいつの間にか六課の隊服を身に纏っていた。

少なからず驚いたものの、今の自分は意識体なのだから、この身に何が起ころうとも不思議ではない。そう無理矢理納得したティアナは、観測所の中へ突入した。

（……やっぱり、あたしの姿は見えないみたいね）

これだけ多くの人が集まっているというのに、ティアナに気付く者は皆無だった。そのことに、一抹の寂しさを覚える。

込み入った廊下を抜けて、所長室へと向かう。情報を集めるのなら、トップの近くにいたほうが何かと便利だろうからだ。

所長室近くまで行くと、人の姿は極端に減った。ソニア所長に状況報告をしにきたらしい少数の者を除いては、ほとんどすれ違うこともない。故にその近辺の廊下は、防音処理を施した部屋以外から話し声が漏れ聞こえるほど静かだった。

所長室前までやってきたティアナは、部屋から聞こえてくるソニア所長の声に、ふと足を止める。

「失踪当時、ランスター執務官は搜索隊の隊長として、安全の確保された遺跡内での搜索隊指揮、及びに単独での高機動行動を主任務に行動していた。我々は彼女を含め、搜索隊から遺跡内の緒情報を逐次受信していたのだが、どういうわけか彼女との通信が何らかの妨害により切断されてしまっただけ。我々は最後まで懸命に通信を試みたが、ついに行方不明と断定せざるを得なくなってしまった。それで」

「どうやら、誰か部外者と話をしているらしい。少し戸惑ったが、どうせ見えないのだからと、ティアナは思いきって所長室へ飛び込んだ。」

「ゴミの一つも落ちていない床とは対照的に、様々な書類の散らばった机。それが客人の目に入らないように工夫されて設置された応接用のソファには、三人の人物が座っていた。」

「以上がランスター執務官失踪までの事件の推移なのだが、こちらとしても事実関係を追いきれていない節もある。所々説明が至らなかった箇所もあっただろうが、ついてはどうかご容赦願いたい」

そう言つて深々と頭を下げる、三人の内の一人。ソニア「リユー  
クエル所長。」

「いえ、我々としても所長の情報提供には感謝しています。おかげ  
さまで貴重な証言を得ることが出来ました」

「今は一刻も早い失踪者の救出が求められています。そのような中  
にあつての捜査への惜しみ無い協力に、重ねてお礼を申し上げます」

そんなソニア所長に對面して座っているのは、八神はやて特別捜  
査官とフェイト「T」ハラウン執務官。見慣れたこの二人の登場  
に、ティアナはしばし言葉を失つた。ティアナの記憶では、二人と  
もまだまだ休暇を満喫しているはずだったからだ。それとも、  
知らぬ間に大分時が経ってしまったのか。

困惑するティアナを余所に、三人は話を進めていく。

「所長、一つお願いをしてもよろしいでしょうか？」はやてが切り  
出した。

「お願い？ ああ、長期滞在用の宿泊設備の説明がまだだったな。  
それならば……」

「いいえ、違います。我々のウィーナ遺跡突入許可を頂きたいので  
す」

それとなく話を逸らそうとしたソニアに、はやてが鋭く待ったを  
掛ける。交渉に関しては、付け入る隙を与えないはやての方が一枚  
上手だった。

「……まあ、そう急かなくてもよいだろう。貴女方はまだこの世界に到着したばかり。ご覧の通り、このサンジェルマンは厳しい世界なのでな。今後の活動の為に、しばし体を休ませてはいかがかな？」

「所長のお気遣いはとてもありがたいのですが、我々は早急に不明者の救出を行わなければならないのです。リユークエル二佐、貴女ほどの立場の人間なら、四年前、JS事件の際に成果を挙げた実験部隊『機動六課』のこと……ご存知のはずですよ？」

尚もやんわりと拒否をするソニアに、はやてが言葉で詰め寄る。彼女が言外に何を言っているのかを悟り、思わずソニアははやての視線から目を逸らしてしまった。

「……ランスター執務官は、かつて貴女の設立した部隊の一員だったか。なるほど、私も部下の命を預かる身。八神特捜の主張は十二分に理解出来る。理解は出来るが……すまない、突入許可は出せないのだ」

「リユークエル所長、貴女はランスター執務官の失踪以後、本局の正式な調査部隊以外には、ただの一度も遺跡の搜索を許可していませんよね。本来なら捜査の先頭に立つべき『サンジェルマン史跡警備隊』も、拠点を提供するだけで全く動きがありません。……何か理由でも？」

「……………」

フェイトの鋭い指摘が飛ぶ。ソニアは押し黙ったまま何も答えない。

「失礼します」と、その時、沈黙を破り新たな人物が所長室へと

訪れた。

「おお、エミール君。どうした、何か進展でもあったのか？」

現れたのは、ティアナの出迎えにも来ていた青年、エミールだった。手には黒つぶい小箱を持っており、ソニアはこれ幸いとばかりに、話題を彼に移した。

「ええ、ようやく失踪者の手がかりとなるものが発見されました。……所長、これを」

少し興奮した様子のエミールは、手にしていた小箱を差し出した。ソニアが開けてみると、中には三つの小さな物体が入っていた。

「これは……！？」

「三つとも本局調査部隊が遺跡内の袋小路で見つけたものらしいです」

「ううむ……八神特捜、ハラオウン執務官、貴女方もこれを見てほしい。私からのせめてもの詫びだ。このくらいの情報開示くらいは喜んでしよう」

はやて達とともに、ティアナも箱の中を覗き込む。そして「それ」を見た瞬間、あっと小さく叫び声を上げた。

箱の中の三つの物体。小さなアクセサリのようなそれは、紛れもなくデバイスだった。そしてその内の一つは、ティアナの相棒に他ならなかったのだ。

「そんな……これ、ティアナの……」

「クロスミラージュ……！」

待機状態のクロスミラージュは、見たところどこにも損傷は見当たらない。他の二つのデバイスについても同様だった。

（……あれ？）

デバイス達を見ていて、ティアナはふと違和感に気がついた。

（何かおかしいような……）

確かに何かがおかしいのだけど、具体的に何かおかしいのかはわからない。ティアナがそんなもどかしさに頭を悩ませていると、不意に周囲が水を打ったかのように無音になった。

ティアナが顔を上げると、すでに変化が始まっていた。景色は静止し、どんどん小さくなる。視界は急速にズームアウトし、所長室の様子が一枚の絵のように見える。絵の額縁はどこまでも暗い黒で、見ていると吸い込まれそうなほど深い。ティアナが己の状況を理解するより先に、世界は完全に暗転した。そして

「っ……！！！」



物凄い勢いで起き上がるティアナ。掛けられていた薄いタオルケットが宙を舞い、ティアナの背を嫌な汗が伝う。

ティアナの目の前に広がっていた光景は、間違いなく機動六課の自室のそれだった。

「夢、だったの……？」

呆然として呟くティアナ。夢にしては出来すぎていたけれど、確かに夢のように荒唐無稽でもあった気がする。どちらにせよ、自分は死んでいなかったらしい。ただそのことに安堵するティアナ。

「気がついたかしら？」

急に声をかけられ、ティアナはハツとした。見れば、椅子に座った銀髪の少女の姿が。

「ルナ、あたしは……」

「ヴィータ副隊長に殴打されて昏倒。流石に死にはしなかったけれど、副隊長は高町教導官に怒られてたわね。やり過ぎだって。ちなみに、結果は私達の負け」

「そう……」

ティアナには、隊長戦をしたのが遙か昔のことのように思えた。あんなに必死になった戦いも、今考えればどうしてあそこまで熱くなってしまったのか理解が出来ない。結局のところ、自分是他者に過ぎないのに。

「ねえ、ルナ」ティアナがぼつりと言った。

「何よ？」

「あたし、帰らなきゃ」

帰らなきゃ。ティアナの言葉に、ルナはじつと彼女の目を見つめる。

「あたし、ここが懐かしくて、つい考えるのを後回しにしてたんだけどね……やっぱり、ここはあたしのいるべき場所じゃない。あたしの居場所は、あたしの生まれた世界しかないんだって」

「……………」

「だからルナ、教えてくれる？ あたしが、あたしを待っていている人達のいる世界に帰る方法を」

ルナの目を見つめ返すティアナ。その迷いのない瞳が、彼女の真剣さを物語っていた。

だがルナはそんなティアナの決意に、困ったような表情を浮かべて視線を背ける。

「いいわよ、って言いたいところなんだけどね……ティアナ、覚悟して聞いて頂戴」

そう言ってルナは少し迷った後、ティアナに向けて言い放つ。

「私達は、帰れない」

ミッドチルダの空は、深い夜の闇に包まれようとしていた。

## 夢か現か（後書き）

どうも、風刻です。相変わらず亀更新で申し訳ございませんm（  
ー）m

今回は一方その頃的なノリで元の世界のスバル達の話です。ご覧の通り、キャラの多さに描写がついていけていません。ごめんリイン&amp;p・アギト&amp;p・ザフィーラ……この三人はまだ一度も本編に出せていません。好きなキャラなのにorz

ともあれ、根気よくここまで読んで下さった皆様、ありがとうございます。誤字などがありましたら、感想欄で教えて下さればありがたいです。

それでは、感想などお待ちしております。

## 小康

「はい、今日の訓練はこれでおしまい。皆、お疲れさま」

隊長戦の日から一週間と少しが過ぎたころ。日に日に厳しくなっていく訓練に、スバル達はへとへとになっているようだった。

談笑しながら隊舎へと戻っていくスバル達。だがそんな中、ティアナは他の皆とは距離を置いていた。時折するため息が、まさに悩める年頃の乙女、といった情景を演出している。

(……ティアナ、まだ元気無さそう。ヴィータちゃんと相打ちになったの、そんなに気にしてるのかな?)

普通ならば色恋沙汰の方面に邪推してもよいものだが、流石は戦技教導官。加えて本人がそういったものに弱いため、どうしても硬い方向に考えてしまうのであった。

(やっぱり、止めれば良かったかな……でも、そんなことしてもティアナは納得しなかっただろうし……)

ヴィータ曰く「予想以上にティアナが強かったので、つい本気になってしまった」らしい。本気のヴィータと相打ちになっただけでも十分凄いのだが、ティアナにはその自覚が無いようだった。

(うーん、そろそろちょうどいい頃合いだし、明日は皆に気分転換でもしてもらおうかな。ティアナも少しは元気出してくれるだろうし)

なのは明日の訓練のプランを立てながら、訓練場でいつまでも一人思案に耽っていたのだった。

と、そんな風にしてなのは悩みの種となっているティアナであったが、当の本人は他人が及びもつかない理由で憂鬱気味となっていた。

周りでスバル達が笑いながら話をしている時も、出来るだけ関わらずに黙々と歩き続ける。彼女の頭を占めているのは、ルナに言われた言葉。気づけば、ティアナはあの日のやり取りを思い返していた。

「私達は、帰れない」

ルナがそう言った瞬間、ティアナの時間が凍りついた。

絶望した様子のティアナを見て、流石に焦ったのか、ルナは慌て言い繕う。

「あ、勿論現状では、ってだけで、帰る方法が無いってわけじゃないわよ」

「……どうということ？」訝しむティアナ。

「私達がどうやってこの世界にやって来たか、覚えてる？」

ティアナは目を瞑り、運命の瞬間を脳裏に再演する。

ルナとの戦い。そして、聞こえてきた耳慣れない合成音声。続くまばゆい光。次の瞬間には医務室のベッドに横になっていた。

「当たり前じゃない。あの魔導書、パンタシアが急に光って、それで……」

「そう。それこそが、私達が元の世界に戻るための鍵」

「つまり、またパンタシアを使えば帰れるってこと？」

無言で頷くルナ。要は、この世界のサンジェルマンまで行って、再びパンタシアを起動すればそれで済むということらしい。ティアナは俄然希望が湧いてきた。

だが、そんなティアナの楽観的思考を、ルナが冷めた言葉で突き放す。

「けど、現実にはそう単純にはいかない。もしそんな簡単に帰れるなら、私はこの世界に二年も留まっていたりはしないわよ」

「……そういえば、あなたはあたしより二年余分にこの世界にいらんだっただわね」

「そういうこと。まあ、私がなんで二年も立ち往生してたかという……信じられないかもしれないけど、この世界にはそもそもパンタシアがあつた次元世界、サンジェルマンが存在しないのよ」

「え……」

「大規模次元震で消滅したか、元々そんな次元世界は存在していないのか……いずれにせよ、私達はそのおかげで帰れなくなっちゃってるの」

ティアナの抱いていた希望的観測は、こうしていとも簡単に手折られてしまった。パンタシアのある世界が存在しないなら、それはつまり「帰れない」と同義であつた。

「でもね」

ティアナの落胆した反応を見越してか、悪戯っぽい笑みを浮かべるルナ。

「パンタシアが転移させる世界には、必ずパンタシアが存在する。つまり、絶対に一方通行にはならない。……何が言いたいか、わかる？」

「……サンジェルマンがなくても、この世界にはパンタシアが存在する、ってわけね」

「その通り。そして私の二年間の調査の結果、その在処はここミッドチルダのどこかだつてことがわかつてる」

きつぱりと言い切つて見せるルナ。この結論に至るまでさんざん回り道をしてきたが、幾度も上げて落とされた結果、希望はまだ残っていることがわかつた。

「なら話は早いじゃない。是が非でも探し出して、とつと帰るまよ」



「飲み込みが早いね。今までは私一人で効率が悪かったけれど、貴女が協力してくれるなら心強いわ」

ニヤリと笑うルナ。ここに、ティアナ達の当面の目標は定まったのだった。

（是が非でも探し出す、なーんて言っちゃったけど、現実はそのように甘くないのよね……）

あの日から一週間以上が過ぎたが、未だに有用な情報は上がっていない。忙しい訓練の合間にちょこちょこ調べてはいたものの、腰を据えてやるには到底時間が足りなかった。

一時期、六課退職を考えたこともあったが、どう考えても生活に困るだろうし、なのは達相手にそんなこと言い出せるはずもなかった。そもそも、ティアナ自身がそれを望んでいない。

（どうせスバルは納得しないだろうし、ね）

目の前を歩く親友の姿を見ながら、ティアナは苦笑する。恐らく泣いて引き止めるであろう彼女の姿を想像すれば、ティアナが押し切られることなど容易く予想がついた。

そうこうしている内に、一行はシャワー室へ。エリオが急ぎ足で男性用の方へ消えると、少し残念そうなキヤ口を引きずって汗と疲れを洗い流す。

このシャワータイム、少しでもパンタシアについて調べたいティアナは、後ろ髪引かれながらも早めに上がることになっていたのだが、どうやら彼女の協力者はそこまで熱心ではないようだ。

「ねえねえ、ルナルナ」

「どうしたの、スバル」

「あたし、今気付いたんだけど」

「ええ」

「あたしつてさ、まだルナの胸、触ったことないんだよね」

「……先に言っておくけど、私はスバルを満足させられるほど大きくはないわよ」

「じゃ、あたしがルナの成長の手助けを」

「却下。余計なお世話」

「えー、いーじゃんいーじゃん」

「ダメ。そんなに触りたいなら、触り甲斐のあるティアナのにしないさい」

「だってティアのはもうマスターしたい」

とまあ、こんな調子で壁越しに聞こえてくる気の抜けた桃色の会話に、ティアナの精神はグツグツと煮えたぎっていた。

そうとは知らず、話題をティアナの胸にすっかりシフトさせたスバル達。二人より先に出て着替えたティアナは、浴室の入り口で仁王立ち。二人を待ち構える。その凄さといったら、続いて出てきたキャラが思わず小さな悲鳴を上げるほどだった。

「うゝん、すつきりしたゝ」

「私はもう少しゆっくりしたかったけどね」

やがて、いかにもさっぱりした様子のスバル達が現れた。そして、目の据わったティアナを見て表情を凍らせる。

「あ……えっと、ティアナ？」

「……スバル、貴女またティアナを怒らせるようなことしたの？」

「し、してないよお！ ルナこそ何かやったんじゃないの!？」

「私が？ バカ言わないで頂戴。どうして私がティアナを怒らせなきゃいけないのよ」

「そんなこと言ったらあたしだって……!」

裸のまま責任の擦り合いを始めるスバルとルナ。ティアナは一度深呼吸して、もう一度息を大きく吸い込むと、

「うるさああいつ!!!」

「「!!!」」

ティアナの一喝に、ピタリと口論を止めるスバル達。

「あんた達……人をダシにして勝手に盛り上がるなんて、いい根性してるじゃない」

「えっと、それはルナが……」

「な、何よ、責任転嫁？」

「事実だもん！」

「だからうつさいって言うてんでしょ！！」

懲りずに責任逃れを始めたスバルとルナに、ティアナはピシヤリと言葉の砲撃を浴びせる。再び沈黙する二人。

「ったくもう、スバルはいつものことだからともかく、何でルナまで悪乗りしてるのよ」

「あら、だって少しはリラックスしなきゃ、この後が続かないもの」

もう少し真面目にパンタシア探しをしてほしい、との含みを持たせたティアナだったが、それを知ってか知らずか、当たり前障りのない答えでお茶を濁すルナ。

一方のスバルは、思いがけず叱られてしまったことに納得がいかない様子。ルナをジト目で見ると、不満たらたらに文句を言い出した。

「ルナが悪いんだよ。素直に胸を触らせてくれればいいのに、ティアの話にすり替えるから……」

「残念だけど、私はそんなに安っぽくないの」

「ねえ、それってあたしが安っぽい女だって言ってる？」

ドスの効いたティアナの台詞に、ルナはビクツと体をすくませる。

「そんな、考え過ぎよ考え過ぎ。深い意味は無いわ。……多分」

「多分って、あんたねえ」

「一言余計だった？」

「確信犯じゃない！」

今にもバイオレンスな惨劇が始まりそうな雰囲気の中、何とか戦火の外に逃れたスバルは、目をぱちくりさせて二人を見ていたが、

「……ティア、元に戻ったよね」

唐突に発せられた言葉。ティアナとルナは同時にスバルを見る。

「元に戻ったって……」

「うん。この前からさ、ティア、ルナによそよそしかったよね。そりゃ、見ず知らずの他人、とまではいかないけど」

「……」

急速に熱が冷め、少し俯くティアナ。ルナには友人らしくそれな

りに仲良く接してきたつもりだったが、やはり、年来の親友だったスバルからしてみれば、どこか遠慮がちに映ってしまったのだろう。

「でも」スバルが続ける。「やっと、前みたいに戻った」

はにかむスバル。ルナと言えば、何やら照れ臭そうにそつぱを向いている。

（……まさか、二人ともこれが目的で？）

思わず勘繰ってしまうティアナ。目を合わせようとしないルナをジーっと見つめると、少し顔を赤くした彼女は妙に素早く着替えだした。

「あれっ、ルナ、ひょっとして照れてる？」

「さあ？」

「さあ、って……やっぱり照れて」

言いかけたスバルの頭に、洗顔クリームの容器が飛来、直撃する。無言でルナに抗議の眼差しを送るスバル。涼しい顔で受け流すルナ。

「……どうでもいいけど、スバル、早く着替えないと食事に遅れるわよ」

「あ！」

ティアナがそう忠告してやると、ようやくスバルも着替えを始めた。そんなこんなで三人揃って更衣室を出た時には、エリオとキヤ

口はもう心底待ちくたびれていたようで。ティアナ達は二人に謝りつつ、全員で食堂へと向かったのだった。

「ええ、ですから……何度も言うつもりですが、私の部隊にやましい人間はおりません。それから、金輪際そちらの世話になることもないでしょう。では」

機動六課部隊長室にて。はやては普段の彼女に似合わない、やや乱暴な調子で通信を切断した。

「全く、なんやっちゅうねん」

「はやてちゃん、どうかしたですか？ ご機嫌ななめに見えるですよ？」

そんなはやてを気遣う、リインフォース？。はやては心配そうに自分を見つめるリインに、優しく微笑みかける。

「大丈夫、中央情報部っちゅう部署の連中が嫌に高圧的だったさかい、ちよおカツとなってもただけや。心配してくれてありがとうな、リイン」

「はやてちゃんが怒るなんて珍しいです」

「仏の顔も三度まで、や」

はやてはわざとらしい不機嫌さでそう言った。

先程の通信は、管理局中央情報部を名乗る部署からのものだった。なんでも、機動六課に経歴がはつきりしない不振人物が紛れている可能性があるため調査させろ、とのこと。令状すら無い非正規の要請だったため、無論はやてはこれを一蹴したのだった。

（そもそも、ほんまに局の部署かも怪しいしなあ。大方、できの悪い局員の悪戯か何かやる）

はやてはそう結論付けると、机の上の書類等を片付けて席を立つ。

「リン、お腹空いてるやろ？ 私はこれから夕食なんやけど、一緒にいこか？」

「はい、お供させてもらいます！」

リンは嬉しそうに返事を返すと、はやての肩の上に収まった。はやては先程の通信のことを記憶の彼方に追いやると、そそくさと部屋を後にしたのだった。

時空管理局。幾多の正義と闇とで彩られた、次元の海に浮かぶ法の船。表の顔である武装局員や執務官、捜査官達が華々しく活躍す



る陰で、巨大な組織を支える為の汚れ役を一手に引き受ける者達がいる。

時空管理局中央情報部。その存在自体は公式に認められてはいるものの、彼らが己の仕事を公表したがないのと管理局自体がこの部署の存在を大っぴらに口にしながらないので、実際にその名を知る者は少ない。予算審議の場面でさえ話題に上ることもないのだから、活動内容となれば尚更だった。

実態不明の中央情報部であるが、本局の一角、一般職員の立ち入りが厳しく制限されているその場所に、彼らの居場所があった。

「……そうか。例の部隊は自主的な協力を拒んだか」

低い男の声がした。

高級そうな肘掛け椅子を初めとする、質の良い調度品で飾られた広い部屋は、一見すると小洒落た屋敷の一室のように見える。だが、薄暗いシャンデリアに照らされたこの一室こそが、紛れもなく管理局中央情報部の本丸であった。

そんな部屋の奥、退屈そうに肘掛け椅子に腰かけている男が一人。

「ソニア、おいで」

彼が手を叩くと、暗がりから一人の少女が姿を現した。金髪をした彼女は、無言で男の前に跪く。

「いい子だね、ソニア。ご褒美として、君には面白い仕事を与えよう」

少女は顔を上げる。その瞳はどこまでも暗く濁っており、まるで意思というものが感じられなかった。

「ターゲットは年代物のアンティークドール。確保に必要なデータは君のデバイスに送っておくよ。さあ、どうか私の為に頑張っておくれ」

「……御意」

従順な少女は、再び暗闇へと消える。

「期待しているよ、私の可愛いお人形」

後に残された男は、口の端に不気味な笑みを浮かべながら、小さくそう呟いたのだった。

## 小康（後書き）

今回は少し短か目です。ここまでオリジナルな話をしてきましたが、次回は原作の流れに戻って「機動六課のある休日」に入りますので（と言っても原作とは展開が違ってくる予定ですが……）その前準備的なつもりです。

ここからようやく物語が本格的に進行していきますので、どうかお付き合いをお願いします。

それでは、感想等お待ちしております。

## 新人達のある休日（前編）（前書き）

累計PV10000 ユニーク2000人突破しました！  
拙作を応援してくださっている方に感謝感謝です！

## 新人達のある休日（前編）

機動六課の朝は早い。特に新人フォワード達の早朝訓練は、彼らの育成を担当している戦技教導官が厳しいこともあり、かなりハードなものだった。それに付いていけている新人達も大したものだが、おかげで実力はめきめきと伸びていた。

最早六課名物となっている高町式教導だったが、何故か今日は勝手が違った。

「全員集合ー！」

なのはの掛け声で、各々が彼女の前に整列する。なのははその様子を見て満足そうに頷き、微笑んだ。

「みんな、朝の訓練お疲れ様。実は今日の訓練、みんなの訓練が次のステップに進めるかどうかのテストも兼ねてただけど……フェイトちゃん、ヴィータちゃん、どうかな？」

テスト。その単語を聞いたフォワード陣の表情が強張る。

「うん、合格」

「文句なしとは言えねーが、まあ、合格だな」

だが、返ってきたのは予想以上に肯定的な評価だった。一転して顔を輝かせるスバル達。だが、ティアナだけはこのイベントが素直に喜べないものだという事を知っていた。

（……今日はルーテシア達と交戦、か）

思わずため息をついてしまうティアナ。この時点では敵同士であるとはいえ、元の世界で親しくなっている相手と命懸けで戦うのは、やはり気が引けた。

おまけにこの事件が過ぎたとなれば、後は公開意見陳述会まで一直線。そうなればノーヴェやチンク、ウエンディ達とも戦わなければならない。更生後の彼女達を知っているがゆえ、ティアナにしてみればやりにくいことこの上ない。よく晴れた空とは対照的に、ティアナの気持ちは滅入るばかりであった。

「ティアナ」

「！ は、はい！」

と、そんな風に思案に耽っていると、なのはが急に呼び掛けてきた。

「大丈夫？　なんだか最近、元気ないみたいだけど……」

「あ、いえ、大丈夫です。何でもありません」

「ならいいんだけどね。でも、もし何か気になることがあったら、遠慮なく相談に来てほしいな」

心なしか少し寂しそうに見えるなのはに、ティアナは心の中で謝りつつ、曖昧に微笑んでみせた。

「それで、今日はみんなのデバイスのセカンドモードを開放、調整しなくちゃいけないし、午前と午後の訓練は無し」

「え、午前も休みなんですか？」

「本当は午前も訓練に回したかったんだけどね。ルナのデバイスが調整に時間がかかるみたいで」

思わず口をついて出たティアナの質問に、なのはは少し困った顔で答える。ルナの方に目をやれば、眩しい銀色の太弓が目についた。

「非人格のアームドなのに時間がかかるって……」

「な、何よ。これは私専用に作ってある特注品だからなの。文句ある？」

「特注品って、あたし達のデバイスはみんなそうだと思うけど」

「ぐ……や、休みが増えたんだから別にいいじゃない！」

「はいはい、二人ともそこまで。とにかく今日のお休みは、普段訓練を頑張ってるみんなへの、わたしからのちょっとしたプレゼント、くらいに思ってくれればいいな」

「プレゼントの使い道なんだけど、緊急時に間に合う範囲で、街に出て気分転換なんてどうかな？　なかなかこういう時間は取れないし、悪い話じゃないと思うよ」

なのはとフェイトの言葉に沸き立つスバル達。ティアナはのんきな彼女達に苦笑しつつ、今日一日の計画を考える。

午後一杯はヴィヴィオやレリック関係で手一杯となってしまうので、パンタシア探しに使えるのは、必然的に午前中だけとなる。とても街で遊ぶ暇などない、のだが。

「ティアっ！ ルナっ！ あたし、アイス食べたい！ ほら、あの店の……」

と、スバルは遊ぶ気満々。とてもではないが行かないなどとは言えなかった。

「あ、それいいわね。実は私も行ってみたいところがあるんだけど……」

（……はあ）

加えてルナも乗り気である。結局この二人に押しきられる形で、ティアナもクラナガン巡りへ連れ出されることになったのだった。

「それじゃあなのはさん、行つてきまーす！」

「フェイトさん、僕達もそろそろ出掛けます」

デバイスの調整が終わり、それぞれが支度を済ませ、いよいよ六課の外へと繰り出すとき。見送りに来た隊長二人の反応は対照的で、にやかな笑顔のなのはに比べ、フェイトは終始心配そうな表情を崩さない。



「暗くならない内に帰ってきてね。あと、あんまり人気のないところには行っちゃダメだよ。それから、何か困ったことがあったらちゃんと人に訊くんだよ？　あ、でも知らない人に付いていっちゃダメだからね？」

「だ、大丈夫ですよ、フエイトさん。僕達も、もう子供じゃないんですし」

（いや、あんたら十分子供でしょうが）

心の中でひそかにツツコミを入れるティアナ。

「でも……あ、そうだ。ルナ」

「はい？」

まだ納得しきれない様子のフエイトは、何を思ったか唐突にルナを指名する。

「悪いんだけど、エリオ達の同行を頼まれてくれない？　同じライティングだし、親睦を深めるいい機会だと思うんだけど……だめ？」

「私は構いませんが……エリオ達が気分を害するのでは？　折角の二人水入らずのデートを、私が邪魔してしまうのは如何なものかと」

ちらりとライティングの二人の方を見てみれば、赤面して俯くエリオと純粹に嬉しそうなキャロ트가、絶妙な癒しオーラを醸し出している。

「あ、そ、そつか。……ごめんね、エリオ、キャラ。二人の気持ち、考えてなかった」

「いえ、僕は別に、ルナさんが付いてきてくれるなら安心ですし……キャラも平気だね?」

「うん。わたし、クラナガンってよく知らないから、もし出来るならルナさんに案内を頼めるといいなって」

エリオ達の肯定的な返事に、ルナはティアナ達の方を見る。その意図を察したティアナは、ひらひらと軽く手を振り、

「一緒に行つてやんなさいよ。どうせあたし達のバイクは二人乗りだし、ちょうどいいわ」

「んー、何だかお姉ちゃんって感じでいいじゃん! 『ルナ姉』、ファイトっ!」

ティアナに続けて、スバルもそう囁し立てる。ルナは恥ずかしそうに苦笑いすると、エリオ達の方に向き直る。

「わかったわ。私でいいなら一緒に一緒させてもらおうかしら」

「本当ですか!? ありがとうございます!」

「ルナさん、今日はよろしく願います!」

ルナに向かって、非常に模範的な敬礼をするエリオとキャラ。その波乱に満ちた来歴ゆえか、二人ともどこか子供らしくない。

「ルナ、私のわがままなお願い、引き受けてくれてありがとう」

「隊長の頼みですから。それに普段から、個人的にもエリオやキャラ口ともっと良好な関係を築けたら、と思っていましたし」

フェイトの礼に、素っ気なく答えるルナ。

「それじゃあみんな、あんまり羽目を外さない程度に休日を楽しんできてね」

「はい、なのはさん。スバル、行くわよ」

「オッケー！ レッツ、ゴー！」

なのはに送り出され、まずティアナ達がバイクで走り出す。低速で敷地内を走行しつつ、ティアナはちらりとルナを一瞥し、

『午後ちよつとした事件が起こるかもしれないけど、慌てないで行動して』

そう念話で言い残すと、ティアナ達の乗ったバイクは颯爽と道の向こうへと消えていった。

「じゃあ、私達も行きましょうか」

「フェイトさん、行ってきましたーす！」

「お土産買ってきますー！」

「三人とも、ケガしないようにね。ルナ、エリオとキャラ口のこと、

頼んだよ」

続いてエリオ達も出発する。なのはとフェイトは手を振りながら、微笑ましそうに三人を見送ったのだった。

「乾杯」

手にしたアイスクリームを触れ合わせ、二人の少女はクスリと笑った。

ミッドーの大都市、首都クラナガン。管理局地上本部を初めとする政治の中枢部であり、周辺管理世界を総括する経済の中心地でもある。流行や文化の発信地もここであり、ミッドやその他の管理世界の若者はこぞってクラナガンに住みたがる。ティアナ達が訪れたのは、そういう街だった。

「うーん、こうやって遊ぶのも久しぶりだねー。訓練校以来だっけ？」

「そうね。陸士部隊にいた時はまとまった時間が取れなかったし」

今、ティアナ達はスバルだったの希望により、クラナガンの所謂「評判の店」巡りの真っ最中だった。二人の（といっても主にスバルの）手には最近流行りの食べ物類の入った袋がいくつも握られて

おり、その顔は幸せそうに綻んでいる。

「ねえねえティア、お昼はどこで食べる？」

「あんだ、それだけ買っておいてまだ食べる気なの？」

「だって食べたいんだもん」

ティアナは呆れ半分、羨ましさ半分でため息をつく。健康と体型に気を遣っているティアナにとって、いくら食べようが太らないスバルはちよつとした妬みの対象であった。

とはいえ、この世界のティアナはまだまだ成長期真っ只中。昼過ぎともなると、流石にお腹が空いてきた。結局ティアナはデバイスから地図を呼び出すと、スバルと一緒に良さそうな店を探すことに。

「ん？」

二人が地図とにらめっこしていると、デバイスに通信が入る。ライトニングとルナからのものだった。

『ハロー、スターズのお二人さん』

「あれー、ルナじゃん。どうしたの？」

『ちびっこカップルとその付添人からランチのお誘いよ。まだ食べてないなら一緒にどう？』

『いえ、あのルナさん、別に僕達はカップルじゃあ……』

『ティアさん、スバルさん、シャーリーさんがオススメしてたお店

ですから、きつと美味しいと思います。よければ一緒にどうですか？』

ルナ達の誘いに、ティアナとスバルは顔を見合わせる。

「ティアナ」

「決まりね。ルナ、その提案、乗らせてもらうわ」

『了解。で、場所なんだけど、クラナガン駅前のホテル カサブランカ 120階ね。一応、アクセス情報を送っておくから参考にしてく頂戴』

「わかった、ありがと。それじゃあまた後で」

「じゃあねー」

通信が切れる。それからまもなく、地図に目的の場所が標された。

「早く行こうよ。あたしもうお腹ぺこぺこ！」

「両手一杯に食べ物持ちながら言う台詞じゃないわね、それ」

軽口を叩きつつ、二人は地図上に表示されたルートに従って道を急ぐ。幸い、ティアナ達がいた場所が駅からそれほど離れていなかったため、比較的早く到着することができた。

途切れることなく往来する人々と、天を突くようにそびえる高層ビル群。大都市のテンプレートともいえる光景を見下ろしながら、ガラス張りのエレベーターで上へ上へと昇るティアナ達。

そうして目的の階までやって来た二人を、待っていたルナが出迎えた。

「結構早かったのね。エリオとキャロはもう席を取って待ってるわよ」

「そう。悪いわね、待たせちゃって。そっちはどう？ 休日、楽しんでる？」

「私はボチボチね。もつとも、ちびっこ達は充実してるみたいだけど」

ひょいと差し出された紙切れ。見てみれば、そこには何時に映画、どこどこで散歩、といった綿密な行動計画が書かれていた。

「……ああ、シャーリーさんの」

「デートの予定表、なのかな？」

思わず苦笑いしてしまうティアナとスバル。どうやらこの店のこともここに記されていたらしい。

さて、三人が赤いカーペットの敷かれた廊下の先に進むと、そこは洒落たレストランとなっていた。昼時のためか、結構な数の客がいる。そんな中、我等がちびっこカップルは窓際にある丁度五人掛けの席に座っていた。

「ティアさん、スバルさん、こっちですー」

「ごめーん、待たせちゃった？」

「いえ、僕達も今着いたばかりですから」

ティアナ達も残りの椅子に腰掛ける。そして注文を終えるとすぐ、美味しそうな料理が続々と運ばれてきた。

「んんー、綺麗な景色に美味しい食べ物。最高だね！ シャーリーさんも中々やるじゃん！」

「そうねえ。店の雰囲気割には値段も良心的だし」

適当に感想を述べつつ自らの眼前の料理を消費していく。景色の良さと相まって、中々優雅なランチタイムである。

「……………」

ふと、ティアナはルナが食事もせず、じっと窓の外を注視していることに気がついた。初めはその景色に見とれているのかと思ったが、どうもそうではないらしい。心なしか、その目には微かな憂いが湛えられているように見える。

「……………ルナ？」

「！」声をかけられ、ハッと我に返るルナ。

「箸が進んでないみたいね。どうかした？」

「別に何でもないわよ。ただちょっと懐かしくて、ね」

「懐かしい？ ルナさん、故郷のことでも思い出してたんですか？」



ルナの言葉を聞き、キヤロがそう尋ねる。追放された身ゆえか、  
そういった話には殊更敏感らしい。

「郷愁ってやつよ。本当に遠い所まで来ちゃった、ってね」

「そういえば、ルナのことってあんまり知らないよね、あたし達。  
どこ出身で、家族はどうしてるの、とか」

「僕も少し興味があります。……あ、話したくないのなら無理して  
話す必用はありませんけど」

スバルとエリオまで乗ってきた。「聞いてて面白いものでもない  
わよ」ルナはそう言って首をすくめる。

「知りたいなあ……ダメ？」

「ダメじゃないけど……ただの田舎出身の小娘の上京話、そんなに  
聞きたい？」

（ルナって田舎の人だったんだ）

意外。ティアナの抱いた素朴な感想である。他のメンバーも概ね  
同じような感想だったようで、そのままのやいの盛り上がる  
スバル達。

一方で、ティアナはその様子を遠巻きに眺めていた。ルナの「懐  
かしい」とは、どれほどの意味を持つのか。彼女と同じ境遇にある  
からこそ、安易な気持ちで盛り上がる気分にはなれなかった。

（……ん？）

一人食べることに集中しようとしたティアナの目に、一人の少女の姿が留まった。こちらに歩いてくる彼女に、ティアナはどこで見覚えのあるような気がして首を傾げる。

その少女はティアナ達のテーブルを通りすぎる際、ちらりとこちらを一瞥した。交錯する視線。思わず目を見開いてしまう。

「リユークエル二佐……？」

ぼつりと呟いたその言葉は、少女に届くことはなかった。ティアナの記憶している姿よりも多少幼い様子の彼女は、そのまま足早に歩き去ると店の外へと消えていった。

幸いスバル達はまだ話に夢中で、ティアナの不審な挙動には気付いていない。ホッと胸を撫で下ろすティアナ。

（そっか……ここは所詮パラレルワールド。あれはあたしの知ってる彼女じゃない）

そう言い聞かせ、ティアナは仲間の輪の内に戻る。こちらで六課メンバー以外の知り合いに会うのは初めてのことで、それだけにこの一瞬の邂逅で無性に虚しくなってしまった。もしかしたら、「向こう」の世界から助けに来てくれたのかもしれない。心のどこかに、そう期待してしまっただけなのだ。

結局、ティアナは心にしこりを残したまま、仲間達との会食を終えた。曲がりなりにも残っていた休日を楽しむ余裕は、見る影もなく萎んでしまっていたのだった。

クラナガン中に張り巡らされた地下水道に、重いものが引きずられる音が響く。普段は人の立ち入ることのない陰鬱な空間を、音の主はボロボロの衣服を纏い、傷だらけの体で当てもなく歩き続けた。足に繋がれた鎖と二つのケースが、少女の特異性を物語っていた。

「ママ……助けて、ママ……」

力なく漏れる言葉は誰に届く訳でもなく、闇の中に儚く溶け、消える。流れる水音と少女がケースを引くノイズだけが、弱々しい声など初めから無かったかのような態度で、ただ淡々と鳴り続いていた。

ケースが一つ、鎖から逃れて水面に落ちる。単調なノイズの中の不協和音。少女は気にも留めずに歩み続ける。

平和な時の終わりは、もうすぐそこまで近付いていた。

## 新人達のある休日（前編）（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありません。受験生なので、どうしても時間が……

とまあ作者の身の上話は置いておいて、今回はティアナを初めてするフォワード陣の休日です。タイトルを「機動六課の〜」にしなかったのは、レジアスのおっちゃんの演説シーンとかを丸々カットして、文字通りフォワード陣の描写しかしていないためです。

そして今回はガジェットやルーテシア、アギトとの戦闘がメインとなる予定です。ラストには意外な「あの人」の登場も……

それでは、感想等をお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6990v/>

---

魔法少女リリカルなのはPHANTASIA

2011年10月9日07時44分発行